陰キャ配信者の私が魔王とコラボ動画を撮る事になりました。

パトラッシュS

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある出来事をきっかけに天涯孤独になった陰キャラ動画配信者のキエナ・カピオーレ。

彼女はある日の買い物帰りに、女神から拉致されてしまい、魔王を倒すための勇者に選ばれてしまった。

だが、陽キャラで人気者の魔王を倒すなんて陰キャラ勇者の彼女には不可能。

そこで、機転をきかせた女神の策略により、何故か魔王とコラボ動画を撮る事になってしまう。

斯くして、陰キャラ勇者カップピーの魔王とのコラボ動画を撮るための珍道中が幕を開けるのだった。

※なろうでも投稿しております。

目次

無理ゲーの始まり ―― 1
勇者カッピー勇者になる ―― 11
勇者カッピー仲間を集める ―― 20
仲間が増えたよやったねカッピー！ ―― 29
勇者カッピー顔出しする ―― 39
勇者カッピー旅に出る。 ―― 47
勇者カッピー戦う？ ―― 53
勇気カッピー港町を目指す ―― 62
勇者カッピー過去を話す ―― 70
勇者カッピー港町を楽しむ ―― 77
勇者カッピー初めて野営をする ―― 84
勇者カッピー実食する。 ―― 92
勇者カッピーパンツが爆発する。 ―― 99
勇者カッピー山の街に着く ―― 106
勇者カッピースキーをする。 ―― 111
勇者カッピー小休止する。 ―― 119
勇者カッピー山に登る。 ―― 125

無理ゲーの始まり

皆さんは買い物帰り、いきなり女神とか訳の分からない存在に拉致をされ、勇者になれと言われたことはありますか？
はい、そうですよね、そんな経験なんてないですよね。
私も普通に生きていればそんな経験に巡り合う事なんてないと思ってました。
それに、勇ましい者って書いて勇者なんですよ、どこの世界にコミュ障クソザコナメクジの陰キャの私が選ばれる要素あるんでしょうか？
というわけで、突然なんですけど、女神からの押し売り営業の様な形で拉致をされた私は大変困った状況に陥っております。
いきなり拉致られた挙句に世界を救うため旅に出ろと言われてる訳なんですね。
私はどちらかというとインドア派なんですよ、なんでそんな私が旅に出ないといけないんですか。

「勇者よ！　世界の危機を救う為！　頼む！」
「あ、あの、私、これからゲーム配信があるからちょっと……」
「なんと！　引き受けてくれるというのか！」
「話を聞いてくれませんかね?!」

だから、この目の前にいるトンチンカンな女神をぶん殴っても文句は言われない筈だ。
そもそもなんでこうなってしまったのか？　それについて少しばかり説明しようと思う。
引きこもり陰キャラの私は食料を買いに行くため、外に出て買い物に出かけたわけだが、なんと、近くのスーパーに寄ろうとした瞬間、不思議な光に包まれた。
そして、気づけば何故か知らない家の中で目が覚め、この女神様が

前に立っていた。
そう、早い話が女神様に拉致され、気が付いたらこの場所に連れて来させられたという訳ですね。
さらに、現在、その女神様から勇者になることを強要され、今に至るという感じですね、だいぶ端折りましたけど。

陰キャで、引きこもり、そして、もはや17歳になって彼氏が一向にできなかった私にパーティーを組んでこいと！　そう言うのかね女神様！
女神は私の手を取るとわざとらしく目を拭いながら私にこう告げる。

「何という勇敢な方だ……！　是非、世界を救った後は私の妹をやろう！」
「誰か！　救急車呼んできて！　見ればわかるよね！　私、女だよ！」
「性別など些細な壁だ。え？　私と婚約したいだと？　ふっ……欲張りだな君は」
「えぇ……」

私の話を聞かないどころかなんか気持ち悪くウネウネして顔を赤めている女神さん。
折角、プロポーションが抜群でしっとりとした綺麗な赤い髪に透き通った水色の眼差しなのに言動で全部打ち壊しにきている。
困惑している私を他所にとんとん拍子で話が進んでいるんだよなぁ……陽キャ怖い。
皆、こんな大人になったらダメだぞ。

「あっあっあっ……わ、私、勇者とか無理ですっ！　今まで街で引きこもってばかりだったのにいきなり勇者なんて……」
「まあまあまあ」
「いやいや、何、私の服を脱がして装備着せようとしてるんですかっ

！」

私の服を掴んで脱がせようとしてくる女神に抵抗する私。
やらせはせん！　やらせはせんぞ！
いやだ！　私は引きこもって人気配信者になるんだ！　あ！　スカートをつかまないで！　パンツ見えちゃう！
あ、自己紹介がまだでしたね、私の名前はキエナ・カピオーレと言います。親しい人は……居ませんが、視聴者の人からはカピ子とか、カッピーとかカッピネキとか呼ばれてます。
今、女神様にスカートを引っ張られ、ピンクのパンツが見えてる、長い紺髪で髪の先端が青く、身長がちんまりで無駄に胸がデカいのが私です。
年齢は１７歳、職業、引きこもりです。

「いやぁっ！　見えてるっ！　見えてますからぁ」
「クフフ、もうちょっとだな……じゅるり」

このど変態が！　本当に女神ですかこの人！
じゅるりとか言ってるんですけど！　誰かー！　誰か助けて！
３００円あげるから！
なんなら、私がこの間買った駄菓子もあげます！
と、その時だった、女神の後頭部からガンッと鈍い音が鳴り、きゅう、と私のスカートを掴んでいた女神は気絶してしまった。

「大丈夫ですか？　ごめんなさいウチのお姉ちゃんが……」
「い、いえ……間一髪でしたから……」

危ない、この人、スカートだけでなく、なんと、私のパンツにまで既に指をかけてましたからね。
どこまで脱がすつもりだったんでしょうか……、なんと恐ろしいやつなんだ女神。

私はすかさず助けてくれた方へと視線を向ける。
そこに立っていたのは綺麗な金髪の髪を後ろに束ね、先程と同じ女神同様に透き通った水色の眼差しをした綺麗な女性だった。
ただし、勝気な眼をした女神とは違い、トロンとした垂れ目のお淑やかそうな綺麗な女性である。
フライパンを握りしめている彼女は照れくさそうに笑みを浮かべるとスカートを直している私に話をし始めた。

「私の名は女神、リヴィアと申します。先程はウチの姉であるラヴィアが失礼致しました」

そう言って頭を下げてくるフライパンの女神様。
というかなぜフライパンなんだろうか？　もっといい手頃なものがあった気がするんだけど、ここは敢えて突っ込まないでおこう、似合ってるし。
しかしながら、ラヴィアにリヴィアか……確か、人々が信仰している神様の名前にそんなのがあったような気もする。

「さて、勇者様、お願いです、貴女様に是非世界を救っていただきたいのです」
「はぁ……」

そして、再び最初に戻ると。
仕方ないね、だって私、勇者じゃなくて陰キャクソザコナメクジだもん。痛いの嫌いだもん。
こうしている間にすぐに３０歳とかになるんだろうな、あーやだやだ、年取るのって怖い。

「今、世界では魔物達が暴れ出し、危機に瀕しております、ある時は街も襲われて……」
「え？　でも、この間、街に来た魔物達、砦の波動砲で全滅させられて

ましたよね？」
「……」

そう、そして、私が別に勇者をやらなくていいやと思っているのは近代化しすぎた優秀な街の技術のせいである。
今や、ソーシャルネットワークが流通し、グローバル化が進みすぎたせいで、魔物とかドラゴンとか、そんなのが街を襲う前に消滅させられてしまうのだ。
国連軍もいる為、別に勇者とか要らなくね？　とかいう感じになってしまってる。
なんか、ついこの間とかもキヌッターと呼ばれるツールかなんかでダンジョンなう！　コボルトやばいンゴ！　とか、メントスコーラでゴブリン倒してみたとかわけのわからん動画が上がってたりした。
そんな世の中なのに、今更、勇者？　うん？　となる私の気持ちは多分皆ならわかってくれることだろう。
ちなみによく酒場やギルドで集まってるパーティーとかいうのはサークルみたいな感じなので、つまりは大半、陽キャの集まりである。死ねばいいのに。

「はい、てなわけで私要らない子なのでは？」
「いやいやいや！　そんな事はありません！　……多分」
「多分？」

うんなんだろう、雲行きが怪しくなってきましたぞ。
この女神様達、本当に大丈夫なんだろうか？　大丈夫？　飴ちゃん食べる？
多分じゃないんだが、多分じゃ困るんですけど、拉致られてるこちらの身としては。
そんな中、復活してきた女神リヴィアの姉、ラヴィアは赤い髪を靡かせながらため息を吐きこう話をしはじめた。

「いやな、最近、私達もこんな情勢だから色々世知辛くてな……、ほら、数十年くらい前までは勇者をほいほい送り出してたんだが」
「調子に乗って異世界から引っ張って来ちゃったのがダメでしたねぇ、やっぱり……。……まさかこんな風になるなんて」
「あのイノベーション起こすとか言った奴がヤバかった……あれ以来、私は林檎がきらいになったよ」
「いえいえ、それよりメガネ掛けたあの人の方がヤバかったですよ、ＰＣの前でいつもカタカタしてましたけど」

女神達の話によれば、数百年くらい前までは普通に勇者が必要で世界の危機とかのためによく呼び出していたそうな。
まあ、女神のお二人のお話の通り、異世界から呼びすぎた結果、人類が技術バーストしすぎて、とんでもなく近代化しすぎてもはや、魔物程度じゃ人類の相手にならなくなったという話ですね。
ていうか自業自得なのではないだろうか、そのおかげで私はＶｄｕｂｅｒの配信者としてご飯を食べていけてるんですけども。
いざとなれば、今は国連軍とか出てきますし、比較的安全です。

「まあ、そのだな、異世界人は全部帰して、やっぱり原点回帰という事で自家生産の勇者が１番という結論に至ったわけだ」
「やっぱり、自家製が１番よね♪」
「いやいや、家庭菜園じゃないんだから」

私は勇者の原点回帰に対してツッコミを入れる。
というか、散々、自分達が呼び込んだ異世界人にブーブー言っておきながらちゃっかりその恩恵を受けてますからね、いろんな家具とかテレビとかＰＣとかタブレットとか。
さっき、林檎嫌いとか言いつつ、あれはなんですかね？　林檎のマークがついたＰＣがあるんですがそれは。
そんなの置いてたら説得力皆無ですよ、皆無。
ダメだ、この人達、なんとかしないと。

というか、そもそも勇者に選ばれた私は何をすれば良いのかすらわからないし。
そんな中、リヴィアさんが用意してくれたお茶を啜りながらラヴィアさんはこんな事を語り出す。
「欲求不満な女性がわざわざゴブリンに捕まりに行くなんて数百年前なら考えられなかったんだぞ！」
「本当ですよね、今はすぐに救出されますからねぇ」
「全く、何を考えてるんだか」

いや、まあ、そんな事を言われましてもなんも言えません、あ、ちなみにゴブリンの繁殖方法は他のメスを捕まえてからじゃないとできないらしいです。
適度なのは人間だとかエルフだとか獣人だそうで、とはいえ、ラヴィアさんが言うように相当なもの好きじゃないとそんな事はしませんけどね。
さて、それではここから本題なんですけども。

「というか、勇者って何するんですか？」
「それはお前、旅だな、それに冒険、女遊び……とか？」
「だから私、女ですってば！」
「何言ってるんだ、女遊びは女でもできるだろ！　なんなら私がお前を抱いてやろうか？」
「何故そうなるんですかね……」

私はドヤ顔で言い切るラヴィアさんに呆れたようにカクンと頭が落ちる。
しかもそもそもそれは過程であって目的ではないですからね！
私間違ってないよね！　もうやだ、帰りたい。
しかも、とか？　なんて言ってますよ、この人！　実際、なんも考えてないでしょ。

そんな中、妹の女神リヴィアさんはにこやかな笑みを浮かべこんな事を話し始める。

「あ、なら、魔王を倒すとかどうでしょう？」

「それ今考えついたみたいに言ってませんかね!?　おかしくないですかねっ！　おい！」

「あ、魔王ならちょうどキヌッターやってるぞ、ほら」

そう言って、私に携帯端末を見せてくるラヴィアさん。

そこにはバーベキュー楽しかったなう！　めっちゃ盛り上がったわぁ！　とか書いてあった。

ちょっと待て、魔王めっちゃ陽キャやん？　え？　嘘、こんなん絶対無理やろ、どう倒せっちゅうねん。

「あっあっ無理、無理ですっ！　魔王半端ないって！　こいつ半端ないって！　めっちゃ陽キャラアピールしてくるもん！　そんなん出来へんやん普通！」

「いや、普通にできると思うぞ、普通のやつは」

私が涙目になりながら訴えかけるのも虚しく、ラヴィアさんから冷静なツッコミを入れてくる。

こいつは悪魔か！　いや、女神やったな！　いやいや、無理や！

そんなん無理や！　私にはハードル高すぎンゴ！

しかも、写ってる魔王ちゃんめっちゃ可愛い、可愛さの権化である。

なんたって、銀髪の肩まで掛かるほどのショートカット、赤いながらもパッチリとした眼、それに整った顔立ちが本当にふつくしい。

美しいではなく、ふつくしいですからね、お間違い無く。

黄色の髪留めとかしてますし、本当にあざとさの権化です。無理、こんなん倒せる気が皆無ですよ。

「じゃあ、早速、送ってみるか」

「は？」

そう言うと、ラヴィアさんはどこからか携帯端末を取り出して何やらメールを打ち始める。

ん？　それ、どこか見覚えのある機種なんですが、というか私がよく持ち歩いている……。

何かを把握した瞬間、私の顔から一気に血の気が引いていくのがわかった。

「今度、コラボしましょう、そっちにいきますね、ｂｙ勇者　送信っと」

「ぬあああああああああ!?　それ私の携帯イィィ!!」

何という事でしょう、ラヴィアさんが勝手に私の携帯を使い、キヌッターのダイレクトメッセージを魔王さんに向かって送りやがった。

女神様女神様女神様!!!　困ります！　あーっ!!!　困ります!!!　送信は困ります!!!　あーっ!!!　あーっ！

何ということをしてくれたのでしょう。

もう時既に遅し、私が止めに入る間もなくメッセージは魔王さんに行ってしまった。

「あっ……あっ……あっ……これやばい、どうしよ、どうしよ」

ちなみに魔王ちゃんのキヌッターの登録者数なんと驚異のラスボス級である２００万人、対して私は５０万人くらい。

そう、魔王ちゃんの４分の１にも満たないし、しかも、これは私自身ではなくＶｄｕｂｅｒのアバターアカウントの登録者数である。

戦闘力が段違いなのだ、こんなん勝てんよ……。

「お、返信来たみたいだぞ、魔王から」

「え!?　う、嘘お!?」

そんな中、絶望に打ちひしがれているとなんと魔王ちゃんから返信が速攻で返ってきた。
あばばばは、どうしよ！　どうしよ！　あっあっ、なんで返していいかわからないんだが！
そんな中、ラヴィアさんは魔王ちゃんから来たメッセージを読み上げる。

「是非、コラボしましょう！　勇者ちゃんに会いたい！　だって」
「うぼぁー!!」
「カピ子ちゃん!?　ちょっと！」

私は魔王なのに天使のようなその返信に思わず吐血した。
もう私はダメかもしれない、勇者なんかに選ばれていきなり魔王を倒しにいくなんて。しかも、コラボですって、ハードル高すぎるわ！
薄れゆく意識の中で私はこう思わざるえなかった。というか、思うほかなかった。

陰キャ配信者の私が陽キャな魔王を倒すなんて無理ゲーすぎる！
と

勇者カッピー勇者になる

さて、女神二人から拉致られてから数日後。
私は動画配信者として、皆の前に顔を出してます。あ、もちろんＶｄｕｂｅｒなのでアバターなんですけども。
流石にね、ほら、陽キャラ魔王ちゃんみたいに素顔出して配信とか出来ませんし、Ｇｄｕｂｅｒって言うんですけどね、素顔の配信者さんは。
Ｇｏｏｄｕｂｅｒという無料動画配信サービスを使った職業です。私の場合はヴァーチャルなのでＶｄｕｂｅｒというわけですね、陰キャに顔出しを求めてはいけない（戒め）。
というわけで、勇者に選ばれた私は皆に現状報告をしに来たわけです。

「ヘイ！　はいはーい！　カッピーだぞ！」
『カッピネキ待ってた』
『陰キャの権化』
『イキリ陰キャだー！』

今日は皆に報告があってきたんだが、この仕打ちである。
陰キャなのバレてますしね、なんてこった。誠に遺憾である。まあ、主に私のせいなんですけども。
さて、そんなアホなことを言ってる暇はないですね、本題に入らなければならん。

「さて、皆さんに実はご報告がありまして……」
『お、なんだなんだ？』
『みんなー！　カッピーが脱ぐってよ！』
『パンツキボンヌ』
『パンツは燃やした』

「はいはい、パンツは履いてくださいね、燃やした人は……葉っぱでも巻いててください」

なんでこの人達はこんなに欲望に忠実なんですかね。

パンツは燃やさんでも良かったろうに……どうして燃やしてしもうたんや。

まあ、今更言ったところで後の祭りなんですけどね、この際気にしないことにしておきましょう。

さて、報告なんだが。

「私、実は女神から勇者に選ばれたンゴ、どうしましょう……」

『あ、ふーん（ハナホジ）』

『はーい解散』

『つ　診療費』

「ちょっと辛辣すぎじゃないですかねっ！　もっと優しくして欲しいなぁ……とほほ」

そう言って、私ががっくりと項垂れるようなモーションを見せると手のひらを返したかのように心配したような声があちこちから上がる。

まあ、冗談というかネタにしか聞こえんかもしれないが、こればかりはマジな話ですからね、というか私だって嘘だと思いたい。

勇者といえば魔王、そして、魔王といえばみんな知ってる人気者である。

『いや無理やろ、カッピーじゃ魔王ちゃんは勝てんて……』

『というか勝てる勝てない以前の問題なんだよなぁ』

『カッピネキ諦めろ』

『カッピネキがカットピングされる模様』

「あ、はい、いや、私もそう思うんですけどね、どうやらコラボすることになりまして……」

そう言って、私のアバターは前から視線を逸らす。
いや、そうなんですよね、まさかのコラボ、しかもあの魔王ちゃんとです。みんな、周りはパリピばっかなんだろうなと予想がついてしまいますよ。
もう、吐きそう、というか、狼の群れに羊を投げ込むかのような暴挙ですよ、これ。
私としてはなんとも言えない状況です。しかも、私は魔王ちゃんの元に赴かなくてはなりません。

「というわけで、私、パーティーを探しに行かなくては行けなくなって……あぅ……どうしよう……」
『うわぁ……何というか……うん』
『勇者部を作るんですね！　わかります！』
『おいやめろ』
『無事に帰ってくるんやで』
『勇者部の時点で無事に帰って来れる気がしない』

はい、皆さんも私が勇者であることに対して思わず頭を抱えるような感じになってますね。
いや、その気持ちはよくわかります。引きこもりだった私にはだいぶハードルが高いんですよね、本当。
というか、あの女神二人、私を勇者にしたらなんと街の中にある神殿の祭壇に適当に放り出す始末、またいつでも遊びに来てねーとか言ってましたけどできればもう行きたくない。
ということで、皆さんに報告を終えた私はひとまず配信を終えました。
とりあえずＰＣは持っていきますし、配信機材は大体旅には持っていけそうなんで問題は無さそうなんですけど。
問題はやっぱり、パーティーですよね、どうやって集めようかな。
あ、でも、一人なら心当たりがあります。とはいえ、以前、コラボ

した配信者なんですけど……。
どうだろう、とりあえず明日になってまた考えてみようかな。

それから翌日。
私は事前に連絡していたＶｔｕｂｅｒ配信者である人物と待ち合わせしていた。
ちなみにコラボしたのは半年前というね、しかも向こうから持ちかけられてですけど、それから私は彼女との連絡をブッチした。
こんなんだから友達できないんですよね、はい、わかってます自覚あります。ですから、先に昨日のうちに謝っておきました。

「うぅ……胃が痛い……周りの視線が怖い……引きこもりたい」

帽子を被りマスクして、顔を隠してサングラスまでしてます。
これでは不審者ですが、背に腹は変えられないです、周りからの視線は痛い、やっぱりお外は怖いですね。
私は噴水前でプルプルしながら、昨日連絡した人物をひたすら待ち合わせ時間まで待ちます。
すると、しばらくして。

「ごめん！　待ったー？　あのー……カッピーだよね？」
「ひ、ひゃいっ!?」

いきなり声をかけられた私は思いもよらない声を上げる。
あっ、あっ、ついにオフで会ってしまった。今までこんなことなかったのに、怖い。
私はビクビクしながら小さく縮こまり、声をかけてきてくれた人物の方へと視線を向ける。
そこに立っていたのは、いかにも活発そうな女の子だった。
オレンジ色の耳に掛かるくらいの短髪に短パン、へそ出しにシルクのチューブトップ、そして、控えめな胸。

スレンダーな体型の彼女は私が可愛らしいと思うほど嬉しそうな笑みを浮かべている。
一言言わしてほしい、めっちゃ陽キャラやんけ！
いやいや無理無理怖い怖い、なんでこの娘が私の前にいるの？
あっ、あっ、なんて声かけたら良いんだろう。

「あはははは！　カッピー！　なんでサングラスとマスクしてんのさぁ！」
「あうあう」
「あ、オフでは初対面だから怖かったよね？　ごめんね？」

そう言って、心配そうに私の顔色を伺ってくる陽キャラさん、もとい、知り合いの配信者さん。
この人の配信者名はナッチー、割と名が知れた配信者さんだ。キヌッターのアバター登録者数は３０万人だけど最近また人気が出てきてるＶｄｕｂｅｒさんである。
ナッチーさんとコラボしたのはさっきも話したが半年前、それからは連絡もしてなかったし、まさかこんな可愛い娘だなんて思いもしてなかった。

「とりあえずお店で話そうか？　そこのカフェで良いかね？　カッピー殿」
「う、うん」

私は恐る恐る、ナッチーさんから手を引かれ、近くのカフェに座る。
何というか勢いのある人だ、私とは正反対だなぁ、そのコミュ力が羨ましい。
とりあえず、手荷物を置いた私はコーヒーをナッチーさんに頼んで貰うとその間に深呼吸して心を落ち着かせる。
大丈夫だ、私、なんとでもなる。

「あ、カッピー、半年振りかな？」
「は、はい……その、すいません……」
「良いって良いって！　ねぇねぇ！　良かったら帽子とサングラスとマスク、とりあえず外して貰えたら嬉しいなって」

そう言って、不安そうな表情でこちらを見つめてくるナッチーさん。
あ、そうだよね……やっぱり顔隠したままだと不安にもなるよね。
私はナッチーさんの言葉に思わずギュッと胸元に手を置く、外は未だ怖いし、できれば外したくないけれど、だけど、私はお願いする立場だし。

「あ、無理なら無理しなくても……」
「あ、いや、大丈夫……です……」

勇気を振り絞れ私、勇者に何故か選ばれたんだ。これくらい頑張らないと。
私はゆっくりと帽子とサングラス、そしてマスクを取り外していき、ナッチーさんに素顔を見せた。
私の顔を見たナッチーさんは目を大きく見開く、なんだろう、やっぱりブサイクだったかな？
女神様とは違いやっぱりリアルの人間だと恐怖を感じてしまう。なんでだろう、女神様と話してた時は妙な安心感があって浮世離れしてた感覚だったからかな？
すると、ナッチーさんは私の手を握ると明るい声でこう告げてきた。

「可愛い！　お人形さんみたい！　凄い可愛いよっ！　カッピー！」
「あっあっ、あんまりお店の中で騒ぐと……」
「あ、ごめんごめん、でも驚いた！　顔立ち整ってるし、本当に可愛いと思う、あと……」

そう言って、言葉を区切ったナッチーは私の胸元に視線を向けてきた。
あ、う、うん、言わんとしてることはなんとなくわかるよ、わかるけどできれば触れないでほしい。
私とて、胸の成長は不本意なんだ、ナッチーくらいの体型が羨ましいがそれは口に出さない方が良いだろう。
さて、本題を話すかな、うまく話せるかはわからないけど。

「あ、あの、私、ね？　実は女神様から勇者に選ばれて……」
「へ？　女神？」
「う、うん、昨日なんだけど……女神様から拉致されて、勇者になれーって言われて……ね？」

なんか不思議ちゃんみたいな話し方しちゃってるぞ私、大丈夫か？
いやー、引きこもりすぎて外界の人と話してないとコミュ障に拍車がかかるよね、配信はしてたんだけど、やっぱりリアルで話すのは別だから。
すると、話を聞いていたナッチーはしばらく考え込むように顎に手を置き、黙り込むとしばらくして私に続きを話すように促してくる。

「続けて？」
「あ、う、うん、それでね、魔王ちゃん……とね？　その……」
「倒さなきゃいけなくなったと？」
「い、いや、あの……実は……コラボする事になって……」
「はい？」

私の言葉に首を傾げるナッチー、うん、そうだよね、勇者といえば魔王を倒すんだけど普通はね？
けど、どういうわけか私はコラボする事になりましてね、えぇ、何

でこうなったかわかりません。
私は指をツンツンしながら恥ずかしそうにナッチーに告げる。
それから、足りない部分を補足したり、詳しく話した結果、全容を理解したナッチーは納得したように話を整理して確認しはじめる。

「つまり、カッピーは勇者にされて、女神様の悪戯メールのせいで人気配信者の魔王ちゃんとコラボ配信せざる得なくなったと、魔王ちゃんの元に行く為に旅のパーティーがいるので今集めているところって言う事でいい？」
「うん！　うん！」
「はぁ……何というか、うーん……」

頭を抱えるナッチー、気持ちはわかる、気持ちはわかるよ。
私もそんな感じだったもの、パーティー集めるなんて陰キャな私には無理だって言ったもん。
しかも、魔王ちゃんも乗り気だし！
しばらく頭を抱えていたナッチーはバンッと机を叩くと立ち上がり、いきなり私の手を掴んできた。
な、何事!?　え？　突然どうしたの？

「私がパーティーに入るよ！　カッピー！」
「え、ええ!?」

そう言って、いきなりの仲間宣言に気圧される私。
いや、もう、そんなふうに迫られたら断れないですよ、いきなりなナッチーさんの言葉に戸惑ってはいたが私は思わず顔を引きつらせるとゆっくりと頷いた。
なんやかんやで、私は勇者としての一歩を踏み出し、新たな仲間を手に入れた！
なる気は全く無かったけれども、成り行きだが仕方ない。
こうなったら、うん、もうここまできたら諦めて勇者になるしかな

いかな…。

勇者カッピー仲間を集める

はい、前回ね、見ていた方はわかっているとは思うんですがなんとボッチの私に仲間ができました。

しかも、なんと陽キャラの仲間です。パーティー初手にしてはなかなかにハードルが高かったと思うんですがそれは。

「カッピーの危機だもん！　そりゃ協力するよ！」

「ナッチーちゃん……」

私は手を握ったまま真剣な眼差しでこちらを見つめてくるナッチーさんの目を見つめる。

アカン、眩しい、その目が眩しい、私溶けそう。

闇属性（自称）の私にはその光は眩しすぎます。巣に帰りたい、そして、視聴者のみんながらチヤホヤされたい。

すると、ナッチーさんは何かを思い出したかのように、あっ！　と声を溢す。

「さて、ちゃんとした自己紹介がまだだったね！」

「あ、言われてみれば……」

まあ、今更なんだけども。

確かに互いの本名知りませんからね、ナッチーとカッピーくらいしかわかりませんし、なんならＶｄｕｂｅｒとしてコラボ配信をちょこっとしたくらいの仲でしかないですし。

ちゃんと自己紹介しとかないと、事故紹介にならないようにしなきゃ（ふんす）。

「私はナツメ、ナツメ・チェンバース！　略してナッチーだよ！　まあ、呼び方はナッチーで良いんだけど」

「あっ、あっ、わ、私はキエナ・カピオーレって言います……、み、皆んなからはカピ子とかカッピーって呼ばれてます……」
「あ！　じゃあ私とおんなじ感じだ！　えへへ……」

何この娘、めちゃくちゃ可愛い、天使かな？
陽キャラで天使とかもはや最強ではないですか、強すぎワロタ。もう私じゃなくてナッチーが勇者でいい気がしてきたンゴ。
顔を赤くしながら私に嬉しそうに告げるナッチーについ恥ずかしくなった私は照れ臭そうに下を向く。
そして、自己紹介が互いに終わり、ひと段落ついた後、ナッチーは私に向かいこう告げてくる。

「よし、じゃあ、勇者殿、仲間集めしないとね！」
「あ、あの!?　えっ！　今からですかっ!!」
「そりゃそうだよ、二人じゃ流石に長旅はしんどいからね」

あ、やだ、また人が増えるんですか。
コミュ障の私にはかなり辛い、でも、パーティーは確かにナッチーさんが言う通りもっと必要ではあるんですけども。
でも、ギルドとか酒場とか怖いなぁ行きたくないなぁ……。

「大丈夫大丈夫！　ちょっと賑やかなだけだから！　ね！　ね！」
「あ、いや、あの……」
「先っちょだけ！　先っちょだけでいいからさ！」
「なんの話!?」

そして、私は嫌々ギルドの前に連れてこられ、今現在、ナッチーから店の中に入れさせられそうになっているのでした。
いや、言い方、先っちょだけって……、先っちょだけ入ってもしょうがないでしょう。
まあ、とはいえ、結局は人を誘わなくてはいけないですからね、非

常に不本意なんですけども。
いや、よく考えたら入らなくても良くない？　というわけで私帰りますね、え？　駄目？
店に渋々、ナッチーに連れられて入る私、中には陽キャラがいっぱいいます。お母さん、怖いです、助けて。
店をしばらく見渡していたナッチーさんはしばらくして、一人の女性に目をつけた。
綺麗な長いパツキンを背後に束ねてるチャンネーである。キリッと凛々しい顔つきで髪解いたら腰まであるんじゃなかろうか。
目元もキリッとしてて、なんだか怖いんだな、私はもう帰りたいんだな。

「とりあえず、ほら、あそこに一人で座ってる女騎士さんとかどうかな？」
「ボッチ騎士……」
「こらこら、そんな事言わないの」

いかん、またお口が余計なことを口走ってしまった。
でも、ボッチなのはなんだか共感できる。だって私も基本ボッチだもの！
あ、自分で言ってて、なんだか悲しくなってきた、もう死のうかな、そしたら勇者じゃなくてアンデットにジョブチェンジできるやん？
素敵やん？
すると、陽キャラのナッチーさんがなんと見ない間に突撃していた。
ファッ!?　なんだその行動力！　たまげたなぁ。
「ヘイ！　彼女！　今暇ー？　良かったらウチらとお話ししなーい？」
声の掛け方が新手のナンパかな？　なんかいろいろ間違ってるよ

うな気がするんだけど。
てか、チャラいよ声の掛け方が！　今時そんなナンパするチャラ男なんていないよ！　ナッチー！
すると、コーヒーを飲んでいた女騎士はカップをテーブルに置くとゆっくりとこう話をし始めた。

「済まない、それについて何か私にメリットはあるのだろうか？　あ、つまりはこれから君たちと話すことによって得られる私に対するインセンティブの事なんだが」
「あ、やばいこの人めんどくさい人だったわ」
「ちょっとぉ！　ナッチィィ！　本人の前で言っちゃだめぇ！」

なんと、話しかけたのは意識高い系女騎士だったようだ。
なるほど、これはボッチになるのも仕方ないな、横文字をやたらと使いたがる女騎士ってどうなの。
それを一本釣りで釣り上げるナッチーは流石です。だが、意識高い系女騎士は動じてない様子、こいつ強いぞ。
ボッチでも彼女のような強いメンタルが欲しいものである。
あと横文字ってなんだか聞いてたらイラッとするよね、ナッチーがそんな顔してるもの。
話しかけた私達は致し方ないのでこの人と話すことに、めちゃくちゃ美人なのにこの人も残念な類の人かな？

「さて、それではディスカッションを始めようか？　それで、君達は私になんの用があってアポも取らずに話をかけて来たのかな？」
「……あ、はい、そのですね、実はパーティーのメンバーを探してまして」
「なるほど、それはジャストタイミングだ、実は私もパーティーを探していてね、互いにシナジーとイノベーションを起こせる仲間を探していたんだよ」

うわぁ、話してるだけで普通の会話のようで会話でないこの……、なんていうか違和感？
この人、大丈夫かな、横文字使うたびに何故かキリッとドヤ顔するのは若干、カチンとくる。
意識高い系だからなるほどボッチだったのか、あ、いや、ほんとなんかいろいろ残念だな。

「あ、あの……それでですね、良かったらパーティーに……」
「なるほど、サマリーはわかった、私も君たちのチームに入ってあげよう。何、結果には必ずコミットするさ、任せて欲しい、それじゃ、全員のコンセンサスが取れたという事でいいな？　では、パーティーを組むにあたってディテールを詰めていきたいんだが、レジュメはあるか？」
「だぁー！　さっきからその話し方！　話し方を止めいッ！」

そう言って、バンッ！　とテーブルを叩くナッチー。
ついに言ったー！　いや、私も思ってたけど、ついに言ったー！
いや、わかるよ！　横文字多すぎやねん！
日常会話で横文字そんな連呼してたら頭が混乱するわ！　てか使わんしな！
すると、さっきまで意識高い系で話していた女騎士ちゃんはひゃい!?　っと可愛らしい声を上げてびっくりしていた。
うん、テーブルいきなり叩かれたらびっくりするよね。私もビクンってなったもん。

「横文字使いすぎ！　もう日常会話に違和感を感じるレベル！　コミュニケーションに支障をきたしてる！」
「あ……、だ、だがな……その……やっぱり……私のスタンスはデフォルトでこれだから……あの……」
「いや、わかるよ？　でもね？　使いすぎて、皆から干されたんでしょう？　貴女」

「や、やめたげて！　ナッチー！　傷口を抉らないであげて！　トラウマになっちゃう！」

私はナッチーを宥めながら、涙目になりつつある意識高い系女騎士さんの頭を撫で撫でしてあげる。

わかるよ、横文字かっこいいもんね！　使いこなしたいもんね！　気持ちはわかる！　うん！

凛々しい顔つきだった女騎士さんはもはやポンコツ女騎士と化してしまった。

「こ、こんなのコンプラ違反だ……！　私だってナチュラルに話をしてるつもりなんだぞ？　私に対してバイアスがありすぎではないのか！」

「企業じゃないわ！　コンプラ無いわ！　とりあえずあんたにソリューションを提案しなきゃならないってのは間違いないわ！」

「ナッチー！　ナッチーも横文字使い始めてる！　使い始めてるから！」

頭が痛くなってきた、とりあえず普通の会話に戻って。

ほら、皆がこっち見てきてるから、なんだか気持ち悪くなってきた。というかまだ、自己紹介すらしてないんだが。

大体の人は話の内容がわかってるのかな？　何話してんだあいつらみたいな顔でこっち見られてるんですけど。

恥ずかしい、恥ずかしさのあまり死にたい。

「うぐ……、し、仕方ないな……」

「よし、じゃあ普通の会話に戻すわね？　横文字しばらく禁止」

そして、事が収まり、ようやく普通の会話に。

やっと本題に戻れる。うん、今まで、彼女に誰も突っ込んであげなかったのかな？

多分、そんな言葉もわからないのかとかなんとか言って周りから反感を買ってたに違いない、うぅ……なんだかそう考えたらこの娘も可哀想に思えてきた。

「じゃあ、ようやく自己紹介からね？　私はナツメ・チェンバース、この娘はキエナ・カピオーレ」

「……うむ、私はシルフィア、シルフィア・シャルロットだ、シルフィで良い」

おぉ、まともだ、ようやく普通の自己紹介が飛び交うようになってきた。

しかしながらシルフィアというのはまた良い名前である。じゃあ私はシーちゃんと呼ぶ事にしよう。

意識高い系女騎士シーちゃん、ふむ、なんだか動画配信させたらすぐにファンがつきそうだな、今度やらせてみるのも面白そうだ。

「それで、君達は何故、パーティーを集めてるんだ？　そのプロセスを踏むのには何か……」

「コホン……」

「あぅ、……ん、その……理由はなんなんだろうか？」

ナッチーの咳払いに思わず言葉を言い直すシーちゃん。

うん、仕方ないね、でも言い直すのは偉い、私はショボンと落ち込むシーちゃんを撫で撫でしてあげる。

さて、その理由なんだけど、まさか、魔王とコラボ配信するための旅をするからとかなんとも言い出し辛い。

なんて説明してあげたら良いだろう？

「実はそこにいるカッピーが勇者に選ばれてね、魔王とコラボ配信をしに行かなくてはいけない使命をおってるの」

「はい？」

いや、そうなるわ、勇者に選ばれて、魔王とコラボ配信する使命を得たなんてどんなぶっ飛んだ理由なんだって話ですよ。
仕方ないので、私とナッチーとの関係や、私達がＶｄｕｖｅｒである事をカミングアウトした。
それで、女神の悪戯でダイレクトメッセージを魔王に送ったせいでコラボ配信に誘われた事も全て打ち明けた。
そして、返ってきたシーちゃんの反応はというと。

「……なるほど、理解した……。物凄いイノベーションを感じる話だ」
「イノベーションとは……？」

いや、イノベーション要素どこにあった。おかしいでしょう。
斬新的ではあるかもしれないですけどね、普通は魔王は討伐するもんですし、勇者的な立場としてはさ。
私は苦笑いを浮かべるしかなかった。大丈夫かな、このパーティー。

「あ、キヌッターで魔王呟いてるよ？　ドラゴンからスカイダイビングだって、凄いよね」
「登録者数、凄いなこいつ……」
「……やっぱり……コラボとか無理だよう」

魔王ちゃんやっぱりすごいなぁ、また登録者数増やしてるし。
こんな娘とコラボってどんな風にしたらいいのかわからない、まあ、Ｖｄｕｖｅｒのカッピーとして配信したら良いのかな？　わからん。
コラボした結果、頼むから炎上だけはやめてほしい、マジで。
こうして、新たなパーティーメンバー、意識高い系騎士ことシルフィアを仲間にした私達。
勇者カッピーの仲間集めはまだ始まったばかりである。

あ、ついでに登録者数も増やすようにしておかねば！

仲間が増えたよやったねカッピー！

ナッチーとパーティーメンバーを探し、意識高い系ポンコツ女騎士のシルフィアことシーちゃんを仲間にした私達。
さて、その後、二人と別れた私は無事に帰宅。
視聴者の皆にことの経緯と新しい仲間について話すため、またもや動画配信を行うことにしました。
魔王ちゃんと対峙する時に視聴者数に差がありすぎると誰こいつとか思われかねないですからね。

「皆の衆！　聞いてください！　仲間が２人に増えたぞよ！　やったぁ！」
『おめ』
『カッピーやるやん』
『それは…人間ですか？』
『ヒェ…！』
「失礼な！　ちゃんと生きた人間ですよ！　ぷんすこ！」

そう言って、私は視聴者からの強烈なツッコミにプンプンと怒りながら答える。
全く失礼な！　私とてね、やる時はやる女なんですよ！
伊達に勇者に選ばれたわけではないですからね！　勇者バンザイ！　これで、私の陽キャラへの道がちょっと開けてきた気がする。
ちなみに、私の視聴者は通称、カピオカ民と呼ばれています。
なかなか今時って感じの名前でしょう？　黒い粒々ってわけじゃないですけども、いい人たちばっかりなのです。

「で、また明日、１人スカウトして、それから旅の支度をしてようやく出発って感じなんですよね」
『足はどうすんだ？』

『車かな？　まあ、でも旅だしな徒歩か』
『いや、馬車かもしれんぞ』

皆は私の旅の足について質問してくる。
そうですよね、今や近代化した世の中になってしまいましたし、必要な足が入りますよねやっぱり、車や馬車なんて手もあります。
ふふふ、ですが、そこら辺はもう考えてるんですよね実は。

「あ、それなんですが、原チャリですね」
『ファッ!?』
『魔物蠢く地にわざわざ原チャリで向かうのか（困惑）』
『これは予想外にすごい地味な絵面になりそう』

既に４人分の原チャリは用意してあります。
配達の仕事もできますから資金の調達にも便利ですよねー、これは、流行る。
まあ、引きこもり陰キャラの私が長旅に耐えられるのかというのはかなり不安なところではあるんですけどもそこは成せばなるの精神でやるしかありませんね。

「さて、それじゃその話はさておきゲーム配信いってみよう！　今日はね、ホラゲやるぞー」
『お、久しぶりのまともな配信だな』
『カッピー生き生きしてる』
『揺れる（どこがとは言わない）』

さて、ようやく気を取り直してまともな配信ができますね。
ホラゲの内容は洋館から逃げる３Ｄゲームです。いやぁ、前の続きから全然進んでなかったんだよねこれ。
まあ、私としても？　ここはやるしかねーなって事で、旅立つ前に精算しときたかったゲームでもあります。

「ほほう、この暗号…、名探偵カッピーならこんなもん勘で解けますよ」
『名探偵とは？（哲学）』
『おい、推理しろよ』
『思考を放棄してますねぇ』
『やーい！　お前の姉ちゃん脳筋勇者ー！』
『カンタァ！』

そして、案の定、トラップが発動し、私の操っているキャラクターの頭上から幽霊が飛来し、頭を持っていかれ、キャクターが瞬殺されました。
私は思わず、あっ、と声を溢します。
まさか、こんな仕掛けになるとは思いもよらなんだ。だって瞬殺ですよ？　たかだかトラップ一つ間違ったくらいで、なんたる理不尽。
それからはもう散々でした、クリーチャーから引きちぎられ、幽霊からはメタメタにされ、私のクソ雑魚プレイが光ります。

「んにゃあー！　また死んだぁ！」
『クソ雑魚プレイ（笑）』
『残機が減る減るぅ』
『んにゃー可愛い』
「もう絶対ゆるさねーからな！　見とけよ！　見とけよ！」

私はそれから、幽霊を神回避していき、ついにラストシーンにまで辿り着くことに成功しました。
ゴリゴリ死んだけど、最後に勝てばええねん。
ホラゲごとき怖くないわ！　幽霊よりな！　リアルの人間の方が百倍怖いんですよ！（体験談）。
ふっ、勇者になった私にホラゲの幽霊で敵うやつなんているんですかね？　敗北を知りたい。

『フラグ乙』
『しっかりと建てていくぅ！』
『イキリ始めたら大体死ぬ』
『イキリ予兆』
「なんだと！　見てろよ！　絶対ノーミスでラスボス倒してやるからな！　オラー！　あっ…」

はい、しっかりとフラグを回収、ラスボスから即殺されてしまいました。
それからは長い持久戦に突入、ホラゲのラスボスってこんな強かったでしたっけ？
四苦八苦しながらも懸命に体力ゲージを削り、なんとか最後の最後でラスボスの打倒に成功しました。やべー、コントローラー投げるとこだったわ。

「どうだー！　勝ったぞー！」
『敗北を重ねまくったんだよなぁ』
『変にイキるから…』
『そういうとこやぞ』
「うぐ…ぐぬぬぬ…か、勝ったらからノーカンです！　ノーカン！」

しかしながら、称賛の言葉でなく、カピオカ民からは辛辣な言葉が飛来してきます。私の頑張りとは一体。
まあ、積んでた積みゲーも実況が完了できましたし、なんの憂いもないですね、これで心置きなく魔王の元に向かえるというものです。
いやマジで行きたくないんだが、本当、なんでこんな事になったかな。

「さて、今日の配信はここまで！　次は旅の最中になるかな？」
『カッピー乙！』

『いやぁ、面白かった』
『カッピーママ…』
『気をつけるんやで』
『体調管理は大切やぞ』

私が動画の締めに入るとカピオカ民の皆から温かいお言葉が投げかけてもらえました。
まさか、魔王とコラボするために長旅をすることになろうとはね、しかも、それがいつの間にか勇者の使命になってるもんだからどういう事やと言いたい。
とはいえ、明日の準備もあるから早く寝て備えなきゃね。

「じゃあ！　グッバイ！　カッピータイム！」

そう言うと私は動画の配信を終了させる。
そのあとは、とりあえず旅の準備を始めた。まずはテントとか寝袋とか、長旅に必要な金銭やら道具やら。
あちらこちらを探して周り、出来るだけ用意できるものは用意しておいた。
あと、足りないものは明日買い足せば良いだろう。
それから私は布団の中に入り、ぐっすりと眠りの中に落ちるのであった。

それから、翌日。
ナッチーとシーちゃんの2人と合流した私は最後の仲間の1人を勧誘するために昨日訪れたギルドとは別の酒場に足を運んだ。
うわぁ、陽キャラがいっぱいいる。酔っ払いもちらほら。
なんでこんな場所に私達がわざわざ足を運んだのか？　それにはちゃんとした理由がある。
実は昨日、ナッチーにお願いをし、知り合いの動画配信者と紹介してもらえるように取り計らい、この酒場で待ち合わせをする事になっ

ているのである。

「賑やかなのは苦手なんだけどなぁ…」

「まあまあ」

小さく縮こまる私にナッチーは心配しなさんなと優しく肩を撫でてくる。

対人恐怖症もある意味ここまで来ると、だいぶ重症かもしれないけどね、まあ、私がこうなってしまったのにもちゃんとした理由があるんだけど、それはまたの機会に話そうと思う。

しばらくすると、大人しそうな綺麗なお姉さんがこちらの席に向かってやってくるのがわかった。

茶髪のサラサラした綺麗な髪にお淑やかそうな物腰、それでいて、慈母の様な優しげな目は女神の様にも感じられる。

「あ、お姉ちゃん！　こっちこっち！」

「あらあら、ナッちゃん」

そう言って近づいてきたその女性の姿に私とシーちゃんは思わず顔を見合わせた。

なんだこの美人のお姉さんはと、そして、極め付けはその豊満な胸である。これは母性を感じられた。

サイズ的には私と同じくらいだけど、身長が高い事もあって美女という言葉がぴったりの女性である。見た感じ、職業は魔法使いといったところだろうか、しかしながら全体的に色気が半端ない格好である。

「紹介するね！　この人は私の姉のリーン・チェンバース！　魔法使いなんだ！」

「はじめまして♪　リーンですっ」

たゆんと目の前で弾むど迫力の胸、隣にいるナッチーと見比べるとその差は一目瞭然であった。
そんな眼差しをシーちゃんと一緒に向けたものだから、怖い笑みを浮かべたナッチーから、何か言いたいことでも？　と顔を詰められてしまった。
身の危険を感じた私とシーちゃんは全力で首を振り、なんでもないことを必死でアピールした。
正直、殺されるかと思いました。あれだね、私もそうなんだけど、胸囲の格差社会が生まれてしまってるね。
本当に申し訳ないと思っている。
それから私はナッチーの姉であるリーンさんに自己紹介をそれぞれし始めた。

「は、はじめまして！…あ、キエナ・カピオーレって言います！」
「シルフィアだ。シルフィア・シャルロット、どうぞよろしく頼む」
「あらぁ、こちらこそよろしくねぇ」

そう言って、優しい手で包み込む様に握手をしてくれるリーンさん。何がやばいって？　母性がやばい。
拝啓、カピオカ民の皆、朗報です。ウチのパーティーにお母さんができました。
ナッチーよ、これもうお姉ちゃんやない、お母さんや！
こうして、魔法使いリーンさんを迎えて４人になった私達一行はようやく旅立ちの準備に取り掛かる事ができる状態になった

「よし！　じゃあ、自己紹介も終わったし！　それじゃ必要なものを買い集めて、噴水前で集合ね！　皆いい？」
「お、おー！」
「了解した」
「わかったわ」

ナッチーの一声でとりあえず各自、旅に必要な準備に取り掛かる事に。
これでは誰がリーダーかわからんね？　私はむしろナッチーがこうしてくれて本当に助かってくれてます。やっぱりナッチーを最初に誘っておいて本当によかった。
私だけだと本当にやばかったと思う、というかもはやこの街どころか自分の家から出なかっただろうな。
そして、言い忘れていたが、ナッチーのお姉さんであるリーンさん、この人もまた、動画配信者である。
この人の場合は主にクッキングチャンネルとかお化粧のチャンネルとか主婦向けや若いお姉様方向けの動画を配信しているＧｄｕｂｅｒですね。
割と有名な方でキヌッターの登録者数は６０万人ほど、すごい社交的なお姉さんである。

さて、話を戻すが、解散から数時間後、各自、準備が終わり噴水前に集合した。
さあ、そして、そんな彼女達の前に置いてあるものがある。それは今回の移動手段、つまりは足だ。

「カッピー、あのさ」
「うん、どうしたの？」
「聞くけどさ、これ…何？」

そして、彼女達の目の前にあるもの。
それは言わずもがな、４台の原付バイクであった。名前をスーパーカブという、動く原動力は魔力というとてもエコなマシーンである。
こちらを見て訪ねてくるナッチーに私は満面の笑みを浮かべ、そして、サムズアップで答えてあげる事にした。

「スーパーカブ！」
「うん、わかったとりあえず目を瞑れ」
「待って！　暴力はダメ！　ちょっと待って！」

そう言って、目を光らせて拳をパキパキ鳴らしてこちらに向かってきたナッチーを慌てて宥める。
そうだ、まずは話を聞いてほしい。
私とて言い分はあるのである。

「私はね、思ったのよ、遠くに行くならね、節約しなきゃと思ったわけですよ」
「はあはあ、なるほどね？　…で？」
「これ見た時ね？　あ、コイツは安いわってなるじゃない！　気づいた時には四台買ってた」
「おい、コイツ勇者にしたやつ馬鹿だろ」

そう言って、ナッチーが言う前に厳しい言葉がシーちゃんから飛んでくる。
四台安かったんだってば！　これなら節約になるし！
そんな馬鹿とか言わないで！　違うの！　ただ世間知らずなだけなの！　そんな中、リーンさんは私達のやり取りにクスクスと笑いを堪えていた。何笑ろうてんねん。

「これ一つ１５万ギルすんだよ！　四つ買ったら６０万ギルもすんだよ!?」
「いや、レンタカーでいいでしょうよ、それならさ」

いや、そうはいうもののもう買ってしまったものね。
私はとりあえず原付バイクに跨ってみせると、これは良いものだとばかりに頷いてみせる。
エンジンをつけてみても割と良い音が鳴っていた。ほら見ろ！

良い買い物しただろ！　これ！
この私の勇者にふさわしい勇気ある行動にナッチーも呆れた様に頭を押さえるしかなかった。
つまり、これが何を意味するのか？　要はこういう事だ。
勇者四人のパーティーによる、スーパーカブでの大陸横断、魔王コラボへの旅。
という企画の様な何かになっているのである。
距離を考えればかなりの距離になるだろう、まあ、乗り物がスーパーカブだからね！　仕方ないね！
そして、私達に立ち塞がるのはスーパーカブでの疲労だけではない、エンカウントするモンスターもいるため、これは、大変危険な旅になる事だろう。
今、引きこもり陰キャラ勇者パーティーの過酷な旅の火蓋が切って落とされようとしていた！

勇者カッピー顔出しする

さて、我々四人はカブで大陸を横断し、魔王さんのところに向かいます。
その距離、何と５０００ｋｍ、そう、めちゃくちゃ遠いのです。
そして、その道中にはモンスターも湧きます。ただ、カブを運転しとけば良いってもんじゃないんですね、はい。

「カッピー、それはキツいよ５０００ｋｍだよ？　５０００ｋｍ」
「もう、この際ドラゴンに乗って送って貰った方が良く無いか？」
「それよそれ！」

シーちゃんの提案に便乗するナッチー。
だが、それでは値段が高くつきますし、やはり旅という感じでは無い気がするんですよね。
私は二人に対して、スーパーカブに跨ったままこう告げる。

「馬鹿野郎！　何が起きるかわかんないから旅なんだろう！　…それにドラゴン高いし、もうカブ買っちゃったし」
「ぬあー！　もうこの娘はなんで変なとこでアグレッシブかなぁ！」
「はぁ…頭痛のあまり、脳のキャパシティがオーバーしそうだ」

そう言って、ふんす！　とやる気を出す私に嘆く二人。
スーパーカブを買ってしまった以上はこれで行くしか道はない、逃げ道は無いのである。
そんな中、空いていた一台のスーパーカブにリーンさんが跨り始めた。

「あら、なかなか良いわねこのスーパーカブ」
「お姉ちゃん!?」

「面白そうじゃない、ナッちゃん。せっかくだからやってみましょう？　ね？」

リーンさん、意外とノリノリである。もうこうなるとあと二人がスーパーカブに乗るか乗らないかだけになるんだが、まあ、リーンさんがカブに跨った時点で流れが変わった

ん？　流れ変わったな？　って呟く人がたくさん出てきても良いレベル。

ちなみに強そうではなく、私はすでに強いのだ！　…ごめんなさい嘘です、調子乗りました。

ナッチーはシーちゃんと顔を見合わせてため息を吐くと仕方ないと諦めたように肩を竦め、スーパーカブに跨った。

「よぉし、じゃあ出発するぞー！　皆！　レッツゴー！」

頑張れ！　私のスーパーカブ！　ここまできたらやるしかねぇ！

見てください、すごい絵面ですよ、四人の女の子パーティーがスーパーカブに並んで跨ってる絵面なんて、これはなかなか見られませんよ。

すると、ナッチーは、あっ！　と何かを思いついた様に私にこう告げ始める。

「あ、待って！　それじゃせっかくだからさ！　もう動画撮りながら実況しようか！　交代交代で！」

「あ、それならカメラありますよ、カメラ」

「い、今から撮るのか!?」

「あら！　良いわね！　面白そう！」

そう言って、ナッチーの言葉に共感する様に手を叩くリーンさん、そして、戸惑う女騎士、シルフィアちゃんことシーちゃん。

そんな中、私はバッグからカメラを取り出し始める。一応、小型の

やつを持ってきてたから良かった。まあ、旅の間にゲーム実況も出来たらやろうかなとか考えてたんだよね。
しかしながら、まさかの実況、まあ、最近はよく増えてるみたいですけど私達みたいな事をしてる人達って多分少ないだろうから需要あるかも？
しかも、リアルタイムだし、これはこれで面白そうだ。
顔出しにはちょっと抵抗はあるんだけど、陽キャラリア充の魔王ちゃんとコラボするにはやっぱりある程度の人気は必要だと思うしね。
そういう事で私達は交代交代で携帯端末や小型カメラを回しながら、この旅路を早速、実況することにしてみた。

「やあ！　みんなー！　元気してるかい？　今日から魔王の元にねコラボ動画を撮りに向かおうと思います！　あ！　顔出しは初めてかな？　私はナッチー！　Ｖｄｕｂｅｒをやってるんだけどね！　今日は１回目って事で軽くメンバーの自己紹介をしたいと思ってます！」

そう言って、簡単に冒頭の動画配信を始めるナッチーちゃん。
既に私のチャンネルやナッチーちゃんのチャンネル、そして、リーンさんのチャンネルではこの告知を行なっているので既存のファン達は私達の素顔を見ようと大勢、この動画実況に集まってきていた。
一種のお祭り状態である。けど、嫌いじゃ無いな、司会をナッチーが務めてくれるからだいぶ楽になってるし。
ちなみに司会は交代ずつやる予定、明日は私、次の日はシーちゃん、そして、リーンさんと回しながらやるつもりだ。
シーちゃん動画撮ったことないから大丈夫かな？　不安だから、補助する人も考えとかないと、ナッチーで良いか。
それからナッチーは皆に対して簡単な自己紹介を述べ始めた。

「という事でね、まずは私から、私はナッチーって言います！　知って

る人は知っている。知らない人は覚えてね？　職業は盗賊だよー！
　ふふん！」
『ハロハローー！』
『お！　この娘があのナッチーー！』
『めっちゃ可愛いやんけ！』
『動画いつも見てます！』
「あははー！　ありがとう！　やっぱりリアルの初顔出しは照れるなー」

　そう言って、自身の髪を照れ臭そうに掻くナッチー。
　ナッチーの実況に対して見に来た視聴者さんからのレスポンスが優しく返ってくる。
　視聴者さんからのコメントはカメラから浮き上がってくるデジタル画面から確認できるから安心して欲しい、科学と魔法が加わるとこんな技術も可能なんやね、しかも、読み上げ機能付き、カブ運転してるときは細かい作業とかできないから、この機能は助かるよね。
　便利な世の中になったもんだよ、全く。
　それに、私達の視聴者さん達は基本的には優しい人ばかりですからね、私の動画視聴者であるカピオカ民の皆さんは特にですから、ある程度は安心して配信できるかなーとは思います。
　それから、自己紹介をあらかた終えたナッチーは話題を変えて、次に自分の姉であるリーンさんの紹介に映ることにした。
　リーンさんは日頃から顔出しで動画撮ってますからね、こういう類の自己紹介は得意なはずである。
　あ、ちなみに今、撮影してるのは私です。誰かカメラマンやらないといけないですからね、これも致し方ない事です。四人しかいませんし。
　ナッチーから呼ばれたリーンさんは私が構えてるカメラの前でニコニコ笑いながら登場。
「はじめまして、ナッチーの姉のリーンです！　クッキングチャン

ネルとお化粧チャンネルを見てる方には馴染み深いかもしれませんね、職業は魔法使いです♪」
『結婚してください（迫真）』
『奥様は魔法使い』
『ナッチーのお姉ちゃん美人すぎィ！』
『リーンさん相変わらずお綺麗ですね』
「ふふふ、ありがとうございます♪」
「でしょー！　自慢のお姉ちゃんだからね！」

姉妹仲が睦まじいのは羨ましいですね、私にも妹か姉が欲しかったものです。
リーンさんは満面の笑みを浮かべたままカメラに小型カメラに手を振る。いやー、やっぱり慣れてるなぁ、次はいよいよシルフィアちゃんことシーちゃんの番である。
少し緊張してるみたいだけど大丈夫だろうか？
しばらくして、私はシルフィアの方にカメラを向け、ナッチーはそれのフォローに入る構えを取っている。

「…わ！　私の…名前はその！　シルフィアという！　一応、職業は騎士をやらせてもらってて…！　そのこういうクリエイビティな事をすりゅのは初めてだかりゃ！」
「はいはーい！　落ち着いてねーシーちゃん、皆優しいから大丈夫だよ？」
『可愛い（確信）』
『ポンコツ女騎士って素敵やん』
『あ、この娘、カッピーが言ってた意識高い系女騎士？』
『髪の毛サラサラやんけ！』
『くっ殺セイダー』

そう言って、シーちゃんの初登場に盛り上がる視聴者さん達。
私やナッチーが事前にシーちゃんのことを話してたから、どうやら

すんなり受け入れてもらえた様だ。うんうん、デビューするときって緊張するもんね、よくわかるよ。
さて、それからナッチーのフォローもあり、無事に自己紹介を終えたシーちゃん、さてさて、いよいよ私の出番が来てしまいましたか。
やはり、カメラの前でも緊張するのは緊張しますね。仕方ない、ノリと勢いでやるしかないか。
リーンさんにカメラを持ってもらい、とりあえず私はゆっくりと画面外に待機する

「さて！　皆の衆！　お待たせした！　我らがリーダー！　勇者殿をお出迎えする準備は大丈夫かな？　あ、この場合、なんていうんだろ？　お姫様かな？」
『勇者…一体何カッピーなんだ…』
『どんな陰キャラが…』
『暗そう』
『胸がデカそう』
『ポンコツそう』
『女騎士と勇者がポンコツって大丈夫なんか』

この言われようである。そうだったね、君達は私に対してそんな感じだったね、思い返してみたら。
優しい視聴者さんとはどこに行ってしまったんだろう、良ければ誰が教えてほしい。
【悲報】カピオカ民は私に厳しかった。
誰だ！皆に優しいとか言ってた奴は！　あ、私だったわ。
私は読み上げられるコメント欄に顔を引きつらせながら笑顔を浮かべる。いや、うん、こうやって彼らを訓練してしまったのは私の責任だからなんも言えねぇ。
仕方ないので、私はいつもゲーム実況でやってる挨拶から入ることにした、こうなればやけだ。

「へい！　はいはーい！　カッピーだよ！」
『ファッ!?』
『可愛すぎて草生え散らかしますよ』
『うせやろ！　胸詐欺やなかったんか！』
『ロリ巨乳勇者とか素敵やん』

皆の反応が手のひらクルックルで草が生えそうなんだけど。
いや、わかるよ、私の実況のイメージってめっちゃ陰キャラみたいな感じだもんね。だけどさ、いや、あのね？　もうちょっと優しくしてくれても良いのよ？
私の登場に対する視聴者の反応を見ていたナッチーは苦笑いしながら、私に一言。

「カッピーのとこなかなか辛辣だねぇ扱いが」
「泣けてきますよ、おい！　私をもうちょっと敬え！」
『ほら、カッピー褒めるとすぐ調子乗るから』
『イキりはじめるから』
『お灸が必要なんだよなぁ…』
『イキって自滅するタイプ』
『草』
「なるほど、それには同意だわ」
「ちょっとナッチー!?　それはあんまりだよ!?」

そう言って、流れてくる皆からのコメントに反論する私に周りのリーンやシルフィアから笑い声が上がる。
私、どんなポジションやねん！　あ、でもスーパーカブを自慢げに四台買って揃えたのはちょっとイキってたな、なるほど、そういうことか（白目）。
こうして旅立つ前に私達はカメラの向こう側にいる視聴者さん達にそれぞれ自己紹介を無事に済ませる事ができました。
まあ、走行距離は５０００ｋｍもあるからね、なかなか長い旅にな

るかもしれませんけど。

あ、後、実況するチャンネル名も決めないとな、皆に後でアンケート取ってみよう！　何か名案が出てくるかも！

勇者カッピー旅に出る。

前回、自己紹介をした私達なんだけども、まだ皆には旅の概要をちゃんと伝えきれていなかったのでこれを機に改めてお話ししようという事になりました。

スーパーカブを他所に撮影してるからね、この動画を見てる皆もい加減、後ろの原チャリが気になってきてるだろうから、説明しとかなきゃね。

というわけで、気を取り直して皆さんに私からちゃんと説明しよう。

「はい、今回の旅なんですが、私、紆余曲折があって実はあの人気インフルエンサーの魔王ちゃんにコラボしてもらう事になりまして」

「ほうほう、それで？」

「５０００ｋｍ離れた大陸まで行く事になったんですね、なので、今回、このようにパーティーを組んだわけなんですけども」

『５０００ｋｍってめっちゃ遠くね？』

『そんな距離あるなら空から行くだろＪＫ』

『コラボって大変なんすね』

『魔王ちゃんとコラボするのか！』

まあ、コメント欄ではこのように妥当な反応が返ってきますね。

そう、場所が遠い、だかしかし、それを楽して行こうとすれば旅費が掛かってしまうのは皆さん、周知の事実だ。

というわけで、今回、私達が考えたのがこちら。

「楽な移動手段はお金かかりますよね？　それでですね、あちらのスーパーカブに乗ってね、今回はですね、皆でとりあえず５０００ｋｍ走りきろうと思います」

『（それはひょっとしてギャグで言っているのか）』

『（ファミチキください）』
『（こいつ…！直接脳内に…！）』

はい、視聴者の皆さん、私のあまりにぶっ飛んだ発言に口ではなくついに脳内で話をしはじめました。
なんでだよ、スーパーカブですよ？　しかも高性能のやつ！　かなり乗り心地は良いんですよ？
そんな中、呆れたようにナッチーはため息を吐くと視聴者の皆さんに話をしはじめる。

「うん、普通はそうだよね、だって原付バイクだよ」
「こんな可愛いデザインなのに！」
『そこじゃないんだよなぁ…』
『ナッチー、涙拭けよ』
『誰だこいつ勇者にしたの』

皆さんの辛辣なコメントが胸に刺さるンゴ。
しかしまあ、キャンプグッズとかもあるし！　皆、寝袋とかも持って来てるからなんの心配もいらないよ！　安心して欲しい。
え？　心配なのはそこじゃない？

「というわけで、原付バイクで魔王とコラボの旅！　５０００ｋｍ大陸横断！　始まりってわけですね」
「先が思いやられるんだが…」
「あ、走行中のカメラの撮影は私がオブジェクトを生成してそちらで皆さんにリアルタイムで映像を届けるのでご安心ください♪」
『ママ助かる』
『聖母リーン様』
『ここに教会を建てよう』
『職業聖女なのでは？』

私の言葉にナッチーと同じように頭を抱えているシーちゃんを他所にカメラに向かって満面の笑みでそう告げるリーンさん。
カメラの向こうでは、リーンさんの計らいに視聴者さん達が大歓喜していました。気遣いができるお姉ちゃんって本当素敵だね。
そして、私は思った、魔法使いって凄いんやな、そんな事思いつかんかった、てっきり片手運転しながら撮影するとばかり。
まあ、これなら安全運転に集中できますからね、だいぶ助かります。
さて、それではスーパーカブに跨りまずは目的地を決める事にしましょう、先は長いですしね。

「じゃあ、まずどういう風に目指す？」
「とりあえず、最初に目指すのは１００ｋｍ離れてるこの街かな？シーランドって街」
「おぉ、港町ですなぁ、魚が旨いぞ！」
『この季節は焼き魚に焼酎だな』
『わかる』
『刺身や焼き貝なんかもオススメやね』

とりあえず、私達は海の街を目指す事にした！
距離は馬鹿みたいに遠いけれども、まあ、着くでしょう頑張れば、のんびりと楽しみながら旅をするのも悪くなかろかうて。
ちなみに、原付バイクはロータリー式変速機、ペダルを踏み込む事で1速、2速、3速、そして、再びニュートラルに戻る仕組みになっている。
逆に踏み込めばいきなり3速になるので注意が必要だ。
しばらく全員が操縦に慣れるまで運転し、スーパーカブの操作をマスターしたところでいよいよ、待ちに待った出発。

「ではいってみよー！」
「おー！」

ブロロンと、エンジンを鳴らして勇者一行、原付バイクで街の門を潜り、冒険の旅へ。
原付バイクで隊列組んでるこの光景はとてもじゃないが勇者パーティーには全く見えない。
しかしながら、リーダーである私は新しいカブの乗り心地に心はルンルン気分である。おそらく、この先、１００時間以上運転しなくてはいけない事をこの時、全く理解していなかっただけだろう。
世間知らずとは時に恐ろしい間違いをしてしまうものである。

「さて、運転を始めて1分なんですけども、どうですか？　カッピー」
「えー、あのー、そのー、今更なんですがことの重大さに気付いております」
「今気づいたのかオイ！」
『草』
『心配になって来たゾ』
『ナッチーが可哀想でアーナキソ』

そう言って、大体、1分あたりでこれはめちゃくちゃキツくなるなって事を理解しました。
理解するのが遅かったな、もう街出ちゃったよ、ここまで来て後戻りとか出来るわけない。
というわけでこのまましばらく走り続ける事に、皆がしっかりついて来てるか確認しながら、スーパーカブを走らせます。

「いやー、気持ちいいね、とりあえずは」
「風の一部になったみたいだしね」
「みてろよー、その内、尻が悲鳴をあげるからな」
『尻が悲鳴を上げる（意味深）』
『風属性（原付バイク）』
『雨が降ってきたらえらいこっちゃやで』

そう言いながら、コメントの人達との談笑を楽しみつつ運転を続けます。
皆と話しながら原付バイクで走るのってなかなか無い体験ですからね、何というか楽しいです。
引きこもってた時には考えられなかった体験ですよね、原付バイクで皆で旅するなんて。視聴者さんも居ますから心強いです。

「あのーね、見栄え変わんないよねこれ」
「そりゃそうだよだって原付バイクだもの」
「なんていうかね、こうなるのはわかってたじゃん」
『せやね』
『とりあえず、何かが起こる気はする』
『リーナさんめっちゃ座る姿勢よくて草』
「ふふふ、姿勢は大切ですからね♪」

まあ、原付バイク乗って走ってるだけじゃ見栄えはそんなに変わらないですよね。それは仕方ない、そういうものなんですよ、これは。
だが、皆さん忘れてませんか？　ここは街の外、何が起こるのかわからないのがファンタジーのお約束みたいなものです。
しばらくすると、道端に何やら馬車のようなものが道を塞ぐようにして置いてあります。

「おや？　事故ですかね？」
「いや、待てカッピー、様子がおかしい」
「不自然ねこんな場所で」
『きな臭いな』
『意図的に置いてるねこれ』

そんな風に皆からのコメントからも明らかに不自然な置かれ方をしているという指摘を頂きました。
カブに乗っていた私達はあたりを警戒し、見渡す。

すると、横の草むらから次から次へと武器を持ったモヒカン頭の男達が現れてきた。間違いない、盗賊だ！

「ヒャッハー！　ここは遠さねぇぜ」

「降参しなぁ！　へへぇ、女四人か、悪くかねぇぜ！」

ナイフを携えたヒャッハー達はそう言うと取り囲むように私達ににじり寄ってくる。

あまりの出来事に私も顔を真っ青にしていた。

こんなに男の人達に囲まれるのなんてはじめての経験だし、それに向けられてくる悪意が怖い。

「さてと、それじゃやるしかないね！」

「えっ!?　な、ナッチー危険だよ！」

「大丈夫、私達ならやれるって！」

「うむ、久々の実戦だが、ようやく真価が発揮できるな」

そう言って、武器を構えるナッチーとシーちゃん。

シーちゃんはすっかり忘れかけてたけど、そういや女騎士だったね。

私達はスーパーカブに乗ったまま、それぞれ武器を構えるというシュールな絵面になっている。よくこの集団を襲おうと思いましたねこの人達。

ちなみに私は武器を持っていない、強いて言えば乗ってるスーパーカブだけである。カメラ入れる際に武器を持ってくるのを忘れておりました。武器の無い勇者、あれ？　私本格的にいらない子なのでは？

斯くして、私達は道を塞ぐ盗賊集団とのバトルに突入するのであった。

勇者カップル戦う？

盗賊団から待ち伏せをされた私達勇者一行。
まさか、街から出て三時間くらいでこんな事に出くわすなんて思わないよね、私も思わなかった。
だけど、ナッチー達はどうやらやる気満々みたいです。あ、私は眺めてます、武器持ってないんで。

『はーつっかえ』
『何のためにその胸があるんや』
『そういうとこやぞ』
「だ、だって仕方ないじゃないですか!?　原付バイクだけでどうしろと！」

そう、勇者なのに無力、こんなざまじゃ皆からこんな風に言われても仕方ないですね。
ナッチーなんか、盗賊三人に対して大立ち回りをしている。凄いよねナッチー、陽キャラで戦えて、しかも、配信もできる。
あー、私もナッチーみたいになれたらなぁ。

「秘技、瞬歩斬り！」
「ぐあぁ!?」
「こいつ！　めっちゃ早いぞ！」

そんな風にボーッと眺めてたらもう一人片付けちゃってました。
強すぎワロタ、ちょっと、ステータスを拝見するとナッチーは15レベルくらいだった。意外とレベル高いぞナッチー。
あ、私はレベル1です。下手したら雑魚モンスターも殺せないや。
それで、シルフィアは24レベルくらい、リーンさんも26レベル。

あれ？　レベル1なのもしかして私だけ？
そっか、シルフィアは元々女騎士として正職についてたらしいし、リーンさんはナッチーのお姉さんだから色々経験豊富そうだもんね。

「フレイムブレイク！」
「ハイスラッシュ！」

そして、二人もナッチーと同じくらいかそれ以上の活躍を見せていた。
凄いな、本当、ビックリするくらい強いや、皆。いや、私が居ることが本当に申し訳ないレベルですね。
陰キャラなんで、ずっと部屋に籠りっぱなしだったのがダメだったな…。
すると、盗賊達は悪知恵を働かせたのか、原付バイクに未だ跨っている私の方へと視線を向けてくる。
うわ、まさかこいつら。

「うぐっ！　こ、こいつら手強いぞ！」
「あ、あの背後にいるチビのデカ乳女を狙え！」

声を上げる盗賊達、なんと、標的を私に定めてきやがったのである。
さ、最悪だ！　ど、どうすれば！　わ、私、戦った事なんて無いし！　ましてや、雑魚モンスターならともかく、いきなり人間だなんて！
早くも絶対絶命のピンチ、そんな私のピンチを目撃したナッチーは声を上げる。

「カッピー！　逃げて！」

い、いや、逃げろっていきなり言われても、どうしよう！
と、とりあえず、原付バイクでとりあえず逃げ回るしかない!?　あ、

アクセル入れないと！
そんな時だった、原付バイクにアクセルを入れようとした私の元に既に盗賊二人が武器を振りかぶり迫ってくる。
もうダメか！　そう思った瞬間だった、脳内にある言葉が流れ込んでくる。

『アクセルを逆に踏み込み3速にいれるのです！』
「…!?　は、はい!!」

私は咄嗟に原付バイクのアクセルを逆に踏み込み言われるがまま3速に入れた。
すると、原付バイクはブルォンと凄い音を響かせ、ウィリーし、襲い掛かろうとしてくる盗賊の顔面に原付バイクの前輪タイヤが直撃した。
これが後に語り継がれる事になる盗賊顔面ウィリー事件である。
顔面を原付のタイヤで吹き飛ばされた仲間を横目に見ていた盗賊の一人はいきなりの出来事に驚愕の表情を浮かべる。

「な、なんだこいつ!?　うわぁ！」

そして、そのままウィリーした原付バイクでもう一人もぶっ飛ばしてしまいました。
あ、わ、わざとじゃないんです！　原付バイクが勝手に！
そして、大人しくなった原付バイクは私は改めて跨ると先程聞こえてきた声に耳を傾ける。

『勇者カッピー、聞こえますか？　リヴィアです』
「め、女神様!?」
『はい、私です。ただ今、姉、ラヴィアと共にたった今、貴女に授けた力をレクチャーする為に語りかけています』

そう言って、耳元に語りかけてくる女神様。
何！　私いつの間にそんな凄い力を貰ってたの!?　全く気づかなかったわ！
ていう事はさっき原付バイクがウィリーして盗賊二人を倒したのはこの人達の何かしらの干渉か力が働いたという事かな？
それより女神様、勇者カップピーって…、その呼び方どうなのよ。
それはとりあえず一旦置いておこう、それよりも力とは一体。

『その原付バイクとお前のヘッドホンに私達の力を込めてやっといた、まずはヘッドホンだが…どこにある？』
「い、今、一応、バックにありますけど…」
『よし！　でかした！　バックから取り出して付けろ』

そう言って、女神、ラヴィアさんは私にヘッドホンを鞄から取り出すように促してくる。
一応、携帯ゲームの動画配信用にとカメラと一緒に持ってきたヘッドホン。
私はバックからそのヘッドホンを取り出すとすかさずそれを身につけた。これで一体どうなるというのだろう？
すると、私の奇妙な行動に気づいたナッチー声を上げる。

「ちょっ!?　こんな時にヘッドホン!?　なんで!?」

まだ、盗賊達はそれなりの数がいる。そんな中、いきなり自分達のリーダーがヘッドホンなんかを付けはじめたら、何を血迷ったのかと思いたくなるのも仕方ないだろう。
だけど、私は女神様からの啓示に従い、行動している。きっとこれが、何かしら意味がある事だと信じているからだ。
そして、女神様達は私にこう告げてくる。

『急ぎみたいだから、要点だけ教えるぞ、お前が付けてるそのヘッドホ

ンを使えば、この映像を見てる奴らのコメントを選択し、具現化、または実体化させる事ができる』
「つまり…それって…」
『貴女の…いや、貴女達の視聴者全員が貴女達の味方になるって事よ』

その言葉を聞いた私はヘッドホンを付けたまま目を見開く。
という事はつまり、視聴者が私達の映像を見て『剣を提供』ってコメントしたものを私がこのヘッドホンを付けて選択すれば剣を召喚できるって事か。
という事はつまり、なんでもありって事じゃないか！　なんだこのチートは！
そんな特典を頂くなんてなんだか申し訳ないというか、何事も皆が書いてくれるコメント次第って事か。

『それと、お前が乗る原付バイクは可変式の魔法を施しておいた。つまり、そのヘッドホンと連動してる、その原付きバイクも視聴者のコメント一つで戦車や馬やドラゴンなんかにもなるって訳だな』
「め、めちゃくちゃな…」
『ちなみに、さっき選ばれたコメントは『ウィリーして倒すんだ！カッピー！』ていうコメントだ。お前はヘッドホンを付けてなかったから今回だけ、私達の方で選んで発動させておいたぞ』

なるほど、だからさっきウィリーして盗賊二人を倒したのか。
いきなり、女神様が逆に踏み込んでアクセルを3速に入れろって言ったのは無理矢理原付バイクをウィリーさせる為って事ね、成る程。
そして、ある程度、私に与えた力の概要を話し終えた女神様達は最後にこう告げ始める。

『後は実戦あるのみです♪　頑張ってカッピー！』
「ちょっ!?　さ、最後投げやりではないですか!?」

というかさっきからカッピーカッピーと、この人達、もしかして、私達の動画を見てるな！　絶対！

成る程、要点はわかりました。

つまり、私には今、ナッチー、リーンさん、そして、私の持っていた視聴者とさらに、この動画に新たに視聴者に加わった人が全員味方になったという事か！

私は早速、ヘッドホンをしたまま、流れてくる皆からのコメントに目を向ける。

「皆！　今、私に必要なモノを分けて欲しい！　武器をください！」

『武器？　武器だって？』

『なんだろ、いきなり』

『武器って言ったら対戦車ライフルとか？』

『ちょｗ』

『それならボーガンだろ』

よしっ！　コメントが湧いて出てきた。つまり、これを選択すれば良いのか！

私はすかさず、コメント欄から出てきたボーガンというコメントを選択してみる事にした。すると、私の手元にボーガンが出現する。

お、成る程、こういう事か、理解したぞ！

「援護射撃ー！　発射ー！」

『おぉ！　すげー！』

『どうなってんだ一体』

『これは凄いな』

自分達がコメントしたことが反映され、現実化されるという映像に視聴者さん達からは驚きの声が上がる。

対戦車ライフルなんかは私みたいなクソザコナメクジでは使いこ

なせる気がしなかったので今回はやめておく事にしておきました。
とはいえ、視聴者の皆さんに自分達のコメントが反映されて私やナッチー達の力になるという事を理解させるには十分だったかと思います。

「え!? カッピー! ボーガンなんていつの間に!」
「なんだと?」

私がボーガンを使い援護してくる事に対して驚きの声を上げるナッチーとシーちゃん。
まあ、さっきまで私、丸腰だったもんね、そりゃいきなりボーガン使って援護射撃してきたらビックリするよね。
ちなみに、出現させた物に関しては出現させた時点でその使い方が私の頭の中にヘッドホンを通じて流れ込んでくるみたいだった。
これなら、さっき、コメントに上がってきた対戦車ライフルなんかも使いこなせたりできるのかな? わからんけど。
この能力、コメントを選べるあたり、ある程度の取捨選択ができるからこちらとしても大助かりだ。
しかしながら、この能力で私が戦えるようになったとしても盗賊団を半分くらい減らしたとはいえ、数ではかなり不利に変わりはない。
どうしたもんか…。

「やっぱり人数的に不利か、このままじゃ…」
『俺を呼べ! 今すぐ駆けつけるぞ!』
『→いや、場所わからんだろ』
『…数的に厳しいな』

そう言って、呟いているとコメント欄からそんな言葉が飛んでくる。
いや、確かにこの場面でもし助けが来てくれるならそれはありがたいけど、流石にそんな都合良くはいかないだろ。

ナッチー達も流石に敵の多さに疲弊しつつある。何人いるんだあのヒャッハー盗賊団達は…。

「まだやれそう？」

「なんとかね、とりあえずカッピーの援護があるから多少マシ」

「くっ…厳しいな」

疲弊したナッチー達を気遣うようにして訊ねるリーンさん。

そんな中、ナッチー達は先程のように私の元に近寄らせまいとさっきとは戦い方を変えて、私を庇うようにして戦っている。

私も出現させたボーガンで戦ってはいるけど、これではまだ足手纏いだ。

なんとかして手助けしてあげたい、そう、私が考えていると私はさっきの女神様達から話をされていた能力について何か閃いたように何かに気付く。

そうだ！　もしかしてこれもやれるかもしれない！

私はコメント欄を見てあるコメントを選択した。そのコメントとは。

『俺を呼べ！　今すぐ駆けつけるぞ！』というコメントであった。

私の選んだコメントを反映させるべく、ヘッドホンが光を放ち始める。

そして、私達の目の前に現れたのは筋肉モリモリマッチョマンの眼鏡を掛けたどデカい大剣を担ぐ視聴者だった。

「あ、本当に来ちゃった」

『え？　え？』

『何か駆けつけるって言ってたら呼ばれた件について』

『草』

『おい、ガチじゃねーかｗ』

眼鏡を掛けた大剣使いの恐らく視聴者さんは携帯端末をポチポチ

しながら、視聴者さん達とやり取りしていた。
なんと、私は視聴者さんを召喚する事に成功したのである。
マジか、こんな事できるのかこれ！　凄いぞこのヘッドホン！
突然の出来事にナッチー達も盗賊団の連中もポカンとした表情を浮かべていた。
私以外の全員、この筋肉モリモリマッチョマンのメガネの大剣使いを見て、え…誰、このいきなり出てきた人、みたいな感じの反応である。
そんな中、筋肉モリモリマッチョマンの大剣使いのメガネさんは大剣を背中から引き抜くと私にこう告げてくる。

「カッピー氏！　助太刀致す！」
「え!?　カッピー知り合い？」
「視聴者さんだよ！　呼んだんだ！　たった今！」
「呼んだ!?　ど、どういう事だ！」

そう言って、動揺するナッチー達に私はさっき起きた出来事を簡単に説明した。
全ては伝えきれなかったけれど、だいたいの要点は皆、把握できたらしい、助太刀に来てくれた方が視聴者で私が召喚した事を理解してくれた。
そして、それから武器を構えた大剣使いのメガネさんは大きくそれを振りかぶり盗賊団へと突撃していく。
ちなみに呼び出した大剣使いのメガネさんのステータスは…なんと驚愕の５０レベル。
盗賊団達のステータスがだいたい１０レベルくらい。
それから私達は視聴者さんである大剣使いのメガネさんが残りの盗賊団を蹂躙するのをただただ見つめるだけなのでした。
あれ？　これ、私達、もしかしてもう何もすることなんじゃね？

勇気カッピー港町を目指す

前回、女神様に与えられた能力により、助っ人を呼び出すことに成功した私達。
さて、そんな私達、勇者パーティーですが、その助っ人さんの活躍により、ものの数分で盗賊団は血祭りにあげられてしまいました。
筋肉モリモリマッチョマンのメガネさん、メガネに似合わず強すぎです。剣を一振りして人がゴミのように飛んでいく様はもう無双か何かかと思いました。
え？　私達の視聴者強すぎない？　クッソワロタ。
味方でよかったと常々思います、あの人が敵とか私達、蹂躙されてしまいますからね。

「あ、ありがとうございます…えっと…」
「某はGとお呼びください、カッピー氏！　いやはや、間に合って何よりですな！」
「いやぁ、助かりましたGさん！」

そう言って、満面の笑みで感謝を伝えるナッチー。
何というか重量感ある剣を携えていらっしゃるので圧が凄いです。でも、優しげな雰囲気がある方でよかった。
いや、本当にピンチでしたしね、女神様の能力がなかったらどうなってた事か。
とりあえず、私は召喚したGさんと握手して改めて感謝を伝える。

「ありがとうね！　Gさん！」
「いやはや！　こちらこそ！　カッピー氏の柔らかい手に触れられて感激ですぞ！」

そう言って、満面の笑みで答えてくれる視聴者Gさん。
すると、Gさんの身体がだんだんと光の粒子になって消えていく、どうやら、戦闘を終えると召喚された人は自動的に元の場所に送還されてしまうシステムのようだ。
あっ、あっ、も、もっと本当は感謝の気持ちを伝えたいし、お礼がしたいんだけども。

「おや、時間みたいですな…ふっ、またピンチの時は呼んでくだされ、いつでも駆けつけますぞ」

そう言って、戦士は華麗にさるぜとばかりに踵を返して告げるGさん。
うーん、こんなに貢献してくれたGさんに何か出来ないかな？　…あっ！　そうだ！
私は何か閃くと、消えかけているGさんの元に駆け寄っていく、よし、消えるまでまだちょっと時間はあるみたいだ。

「およ？　カッピー氏？　どうなされた？」
「Gさん！　Gさん！　ちょっと屈んで？」
「ん？　こ、こうで御座るか？」

そう言って、私に言われるがまま、少しだけ屈んでくれるGさん。
すると、私は笑みを浮かべると、屈んでくれたGさんの頬にチュッっと優しく接吻してあげる。
ちょっと、今はちゃんとしたお礼は出来なかったから代わりと言っちゃなんだけども、ほっぺキスくらいしか思いつかなかった。
すると、この私がとった行動でコメント欄はもう凄いお祭り騒ぎになっていた。

『うおおお！　G氏！　羨ましいぃ！』
『カッピーマジか！』

『これは次回、俺の出番かもな』
『クソー！　ちょっと鍛えてくる！』

視聴者Gが受けた頬キスに狂喜乱舞である。あ、これ多分、炎上したりしないよね？　大丈夫だよね？
すると、消えかけているGさんは涙を流しながら親指を私の方に立てて、まるで、某機械兵が溶鉱炉に沈んでいく時のようなサムズアップをしてくれた。
あ、い、いや、泣くほどだった!?
そして、Gさんは感動のあまり、言葉に詰まりながらもこう告げてくる。

「あ…ありがとうカッピー氏…、アイルビーバッグ…！」
「うん！　じゃあまたね！」

そして、Gさんは光の粒子となって消えていった。
そんな光景を目の当たりにしていたナッチーとシーちゃんは何故か顔を真っ赤にしてこちらを見つめてきている。
あ、あれ？　私、なんかまずい事しちゃったかな？
すると、ナッチーはスパンっと軽く私の頭を叩くと顔を真っ赤にして動揺しながらこう告げ始める。

「な、何やってんの!?　嫁入り前の娘が!!　ほ、ほっぺにチューなんて!!」
「あぅ…で、でも、他にお礼する物も無かったから…」
「少しは考えろ!?　視聴者とはいえ初対面の人間だろっ！」

そう言って、お二人からお説教を食らってしまいました。
う、うーん、でも善意からの感謝を込めたつもりだったんだけど、まあ、ほっぺにチューなんてそんなに気にする事でも無いと思うんだけどなぁ、良い人そうでしたし。

でもまあ、確かに距離感考えろって言う二人の意見もわかるにはわかる、うん、次からは気をつけよう。
そして、リーンさんはニコニコしながら動揺している二人を宥めるようにこう告げる。

「まあまあ、反省してるようですから…今回は多目にみましょう？ね？」
「……確かにGさんのおかげで助かったのは事実だしね…感謝はしてる」
「真っ先に駆けつけてくれたから多少はね？　ほら、そういうわけですよ」

そう言って、リーンさんに便乗して私もナッチーを宥めるように気をつけながらそう告げる。
私の事を思って言ってくれてるんだろうしね、うん、今度はほっぺにキスはしないでおこう。あれは今日限定です。
まあ、でも視聴者さん達は実に嬉しそうではあった。
元々、画面の向こう側で距離があった私達と関わる事ができるというのは本当に彼らにとっては夢に近いものがある。
それに、Gさんのアカウントをよくよく見てみたら、私が初期の初期、Ｖｄｕｂｅｒとして始めたばかりの頃からよく見て応援してくれていた古参中の古参の方だったらしい。
うん、それならほっぺにキスくらい安い物である。真っ先に駆けつけてもらったしね。

「まあ、何はともあれ、イシューはクリアしたんだ。先を急ごう」
「問題解決ね、問題解決」
「あ、う、うん、コホン！…そうとも言う」
『意識高いっすなぁ』
『サンキューナッチ！』
『ナッチー（職業：翻訳家）』

そう言って、ナッチーの指摘に顔を赤くしながら視線を逸らすシーちゃん。
まあ、コメント欄の皆もシーちゃんのキャラを大体分かってきたようだ。うん、そうなんだ、悪い子じゃないんだよ、ちょっと変わってるだけで。
それも一種の個性だよね、シーちゃんらしさが出てて私は良いと思う。
そして、再び原付バイクに跨る私達、目指すは港町シーランドだからね、先はまだ遠い。
それから、原付バイクを走らせた私達はまた視聴者さん達と他愛のない会話をし始める。

「さて…、あれだね、原付走らせてるだけなのもなんか見栄えしないから質問コーナーでも読んでみよっか」
「おっ！　良いね！　面白そう」
『お！　どんな質問やろ！』
『おっす、帰ったぞ』
『あ、お帰りGニキ、お疲れ様』

そう言って、Gさんもどうやら戻って来たみたいだ。
さて、良いタイミングで来たところで早速、質問の方を読み上げていこうかな？　よし、まず一つ目からいってみよう。
原付バイクを運転しながらナッチーはデジタルで表示されているコメント欄の脇にある質問ボックスから質問を読み始めた。

「んー、なになに？　…質問です！　カッピーの今日のパンツは何色ですか！」
「おわっ!?　ま、また凄い質問が来ましたね…」
「えー、カッピーのパンツはねぇ…私も今日チラッと見たんだよね」
「あー！　あー！　ナッチーダメです！　おやめください！」

『!?』
『ほほう、詳しく聞こうか』
『音声録画した』
『パンツ脱いだ』

ほらー！　そんなこと言うからみんな興味津々ではないですか！
なんで私の下着にそんなに食いつくんですかね！
というか、私の視聴者いっつもパンツ脱いでるな…、風邪ひきますよ？　本当に。
というか私のパンツ見たっていつ？　戦闘中かな？　確かにスカートだけども、そんなに激しく動いてないように思うけど。
私がそんなことを考えてるとナッチーはニコニコ笑顔でこう告げて来た。

「ウィリーした時に見えたよ、良いパンツだった、ご馳走様」
「うわー！　あっ！　あの時っ!?　もはや事件ではないですかっ!?」
『盗賊顔面ウィリー事件』
『黒歴史でワロタｗ』
『ロー入っちゃって、もうウィリーさ！』
『カッピーパンツウィリー事件』
『草』

コメント欄は大歓喜に包まれた。こんな賑わい方は見たくなかっだぞ、おい。
どうやら私が原付バイクをウィリーさせた時に見えたらしい、ちくしょう！　こんなんなら下にジャージ履いとくんだった！　もう遅いけど。
ニコニコ上機嫌のナッチーはもはや、カミングアウトになんの躊躇も無いのかこう告げる。
「可愛い水色だったわね、あんなパンツ履くんだ？　カッピー？」

「あー！　ついに言ったなー！　言ったなー！　覚えてろよー！」
『水色か…』
『ふぅ……』
『クソっ！　あともうちょい早く召喚されていれば！』
『無念だったなＧニキ』
『水色とはやりますねぇ！』

そう言って、大盛り上がりのコメント欄。
何というか、みんな欲に忠実なんですね、ここまで来るともはや感心というか何というか色々凄いですよ。というか、私のパンツを見ようとすな！
そんな中、皆が騒いでる中、衝撃的な核弾頭が意外な人物から投下される。

「あら？　カップーちゃんは水色なの？　私は黒のＴバック履いてるわよ？」
「お、お姉ちゃん!?　ちょっとっ!?」
『ファッ!?』
『強い（確信）』
『リーンさんマズいですよ！』
『決めましたリーンさんのファンになります』
『これはナッチーも履いてるな』
「履いてないわ!!」

なんと、リーンさんが自分の履いてる下着をカミングアウトしたのである。
これにはナッチーも動揺せざる得ない、いや、リーンさんメンタル強すぎでしょう。なるほど、これが大人の余裕という事か。
というかそんな過激な下着なんて付けてもいいんですか…。勇者より勇気あるぞこの人。
さてさて、そんな話を繰り返しながら、走る事数時間。

話してると時間が過ぎるのって早いですよね？　もうだんだんと日が暮れ始めて来た頃でした。

「あ、アレ！　見てよみんな！　灯がついてる！」

海岸に沿うように点灯する街明かりが目に飛び込んできました。
あれは間違いない、おそらくは港町シーランドの街明かりだろう。
しばらく走ってたので、もうお尻も結構やばい、うん、誰だ原付で５０００ｋｍも走り切ろうとか言った奴は。
あ、私だったわ、ブーメランが刺さるンゴ。
何はともあれ、こうして、盗賊を退けて無事に港町まで辿り着けたのは良かった。
宿でゆっくりステータスも確認できるしね。
私達は街に着くとすぐに宿を原付バイクで周り、探しはじめる事にした。

勇者カッピー過去を話す

さて、前回、港町シーランドに辿り着くことができた我々勇者一行は宿を探し回り、ひとまず、一息つける事ができた。
あ、ちなみに賃金は皆が視聴してくれた視聴回数やコメント、広告収入なんかでインセンティブが入ってくるので非常に切迫しているといつ事は今のところはない。
とはいえ、長旅にはいろいろ入り用になってくるので、いずれは何かしら働いて収入を得なきゃならなくなるだろう。世の中はそんなに甘くはないのだ。
話は逸れてしまったんだけども、二人部屋を二個確保できた私達は一旦集まって話をしているところである。
そう、それは私達のチャンネル名の話だ。
今のところカッピーと愉快な仲間たちっていうチャンネル名にはしているものの、なんだか、これではしっくり来ないので新しく名前を作ろうと皆で集まった訳である。

「えーとね、じゃあ、どんな名前にする？」
「そうだなぁー…なかなか難しいよね？」
「意識高い名前なんてどうだろう？　ザ・クリエイターー！　とか？」
「可愛くない、却下」

シーちゃんが自信満々に言った案を却下するナッチー。
シーちゃんがしょぼんと落ち込んでいるので慰めてあげる様にヨシヨシとリーンさんが頭を撫でてあげている。
流石にね？　ほら、私達、女の子四人組だし、もうちょっと可愛い名前とかが良い気がするんだよ。
こういう時は皆の頭文字取るとかで名前を付けるとかって考えたけど、カナリシとか意味わからん名前になってしまうからなぁ…。

うーん、シンプルなのでも良いかもしれない、そんな中、何か考えていたナッチーはこんな案を出し始める。

「じゃあ！　ブレイブガールズってのはどうかな？」
「ブレイブガールズ…、カッコいいけどどうだろう？　リーンさん？」
「そうねぇ…カッコいいっていうのがちょっと強いけど…悪くない名前だと思うわ」
「カッピーは？　どんな名前が良い？」

そう言って、ずいっと私に間合いを詰めてくるナッチー、顔が近い。
私は少し顔を赤くしながら視線をナッチーから逸らし、少し考え始める。そうだなぁ…できれば私達に馴染みやすくて可愛い名前が良いかも…。
ちょっと考えていると私はふと、ある事を思い出した。
そう、それは、私とナッチーが初めてコラボ配信した時のことだった。私達のコンビ名を視聴者の人が考えて付けてくれた事があったのだ。
確か、その時の名前があったはず。えーと確かなんだっけ。

「ヴァルキュリーアデルだったかな？」
「あーそんなユニット名だったね！　そう言えば！」
「ヴァルキュリーアデル…うん、それも悪くない気はする」

案はたくさん出るけども、なんだかコンパクト感に欠けるんですよね。
良い名前が出るばかりにどれにするか迷ってしまいますなぁ、こうやって皆でチャンネル名考えるのもちょっと楽しかったりします。
新鮮な体験です。

「ヴァルキュリオン…とか？」
「おぉ、なんかカッコ良くなったな」

「でもなんかコレジャナイ感」
「わかる」

そう言って、皆に確認を取る私。
あ、なんか、一歩間違えたら人型のロボットっぽい名前になって来た気がする。可愛さとはなんだったのか？
名前決めるのって難しいよね？　皆どうやって決めてるんだろうか。
そんな中、考え込んでいたリーンさんは笑みを浮かべて口を開きこう提言しはじめる。

「ブレイバーズなんてどうかしら？」
「…うん、シンプルイズベストですね」
「流石お姉ちゃん！」
「決まりだな！」

リーンさんの鶴の一声、名前はブレイバーズに決まりました。
なるほど、女の子っぽさは無いですが、シンプルで語呂感が良い！
ブレイバーズチャンネル！　って言っても別にクドくないし、私としては大変満足です。
という事で、私は早速、皆さんに報告しました。いやぁ、今後がこれで楽しみですね。

それからしばらくして、とりあえず皆さんはそれぞれの部屋で休む事にしました。
私はナッチーと同じ部屋です。なんか、今まで一人だったから落ち着きませんね。

「…カッピー、寝れないの？」
「…あ…はい」

そう言って、私は寝ていたベットから状態を起こして座る。
何というか、今まで事を考えてると落ち着かなくてなかなか寝付けませんでした。
引きこもりだった私がいきなり、勇者にされて魔王ちゃんとコラボ配信をするための旅に出るなんて思いもしなかったですからね。
そんな私の事を不思議と見つめていたナッチーは私のベットに腰掛けてくると、優しい声色でこう問いかけてくる。

「私さ、実はカッピーにずっと聞きたかった事があったんだ」
「…え？」

そう言って、私の目を見つめてくるナッチー。
なんだろう、聞きたかった事って、私が話せる事なんてさほど大した話は無いと思うんだけども。
すると、ナッチーは私の手を握るとこう問いかけてくる。

「カッピーは…さ…。どうして引きこもりになったの…？」
「…ッ!?」

私はそのナッチーの質問に目を見開くと自分の胸元をギュッと握りしめた。
うん、いずれは何かしら聞かれるんじゃないかなって思ってはいたんだ。
ちなみに、私が引きこもりの配信者になった経緯は私の動画を見ている視聴者さん達は知っている。
本当はトラウマだから、あまり話したくはない事ではあるんだけど、ナッチーや仲間の皆には打ち明けても良いかもしれない。
私はその事について、少しばかり深呼吸するとナッチーにその事について語る事にした。

「…実は……私、虐められていたんです……」

「えっ？」
「元々、養成学校に行ってたんですけど…そこで…」

私はそうポツリポツリ話始めると同時に自然と涙が出てきた。
そう、私は前からこうなってしまった訳じゃない、それにはちゃんとした理由があったのである。
私が通っていた養成学校では、お金持ちの人とかの子息も通う学校だった。
貴族制を廃止はしていたものの、貧富の差は激しい世の中だったので、豊かなお金持ちのお嬢様とかお坊ちゃんなんかも普通にいるのが当たり前でした。
私の家庭はどちらかというと貧しい家庭でそれでも幸せな家庭だったのでした。
もちろん、そういう人達とはクラスは別れていたし、関わる事は無いと思っていました。
だが、ある日を境に私は容姿や家庭が気に入らないという理由である女の子を中心に壮絶な虐めを受ける事になったのです。
それは、私がたまたま見かけたその女の子達のイジメの現場に遭遇し、それを止めに入った事がきっかけでした。
その矛先は私に向けられるようになったのです。
それからというもの、私は毎日、毎日、罵声や暴力を振るわれ、奴隷民と蔑まれました。
私は存在する価値の無い人間なのかと自問自答する毎日、だが、それだけならまだ自分が我慢すればどうにかなると思っていました。
しかし、あろうことか、その女の子達は私の家族に濡れ衣を被せ、私の家庭をめちゃくちゃにした挙句、両親は処刑され、妹は…。
「…い、妹は…その…」
「大丈夫、辛いならその事は話さなくて良いわ」
そう言って、ナッチーさんは私の背中をさすりながらそう告げる。

私達家族は何もしていないのにそんな仕打ちを受け、私以外は全員消えてしまいました。
妹も散々弄ばれ、惨殺されたと聞かされた時は気が狂いそうになったのを鮮明に覚えています。
それから私は逃げる様にその学校を辞めて、街から逃げ出し、新たな街で引きこもる様な生活をするようになりました。
その時に出会ったのがＰＣであり、家族が残してくれたお金や財産をその時持ち出していたので、それを使って必要な機材を集めて動画配信を始めたというわけです。
本当に心を抉るような出来事でした。
私の妹も辛かったはずなのに助ける事が出来なかった事を今でも後悔しています。
私が今まで親しく話していたクラスメイトだった友人が掌を返して虐めて来た経験は忘れたくても忘れられません。

「…辛かったね…カッピー…」
「うっ…ぐすっ…うあぁぁぁぁ…!!」

私を優しく抱きしめるようにそう告げてくるナッチー。
帰る場所さえ奪われ、壮絶ないじめにより私の心が壊れてしまう時に救ってくれたのは視聴者の皆さんでした。
画面の向こう側でも、私の事を真剣に心配してくれたり、優しくしてくれた事を忘れた事はありません。
この経験があったこそ、私は今まで顔出しで動画配信しなかったという経緯もあります。
もし、顔がバレたら、あの人達から何されるかわからない、そんな嫌な記憶がフラッシュバックして辛くて仕方ありませんでした。
だけど、今は、こうしてナッチー達と一緒にいるからまた挑戦することが出来ました。
陰にいる私にナッチー達が手を差し伸べてくれたんです。感謝してもしきれないですね。

私はその日、そのまま溜め込んでいたものを吐き出すようにナッチーの胸元で涙を流しました。
人前で涙を流したのなんて、いつぶりでしょうね？
それから、泣き疲れた私はそのまま眠りについてしまいました。

勇者カップピー港町を楽しむ

ナッチーに過去のことを打ち明けてから翌日。
私達は小休止するために港町シーランドを少しばかり散策する事にしました。
どうやら、いろんな名所があるみたいですし、シーランド、特に魚介類が豊富に取れるので美味しんだとか。
一応、港町ですしね、ここ、季節がもうちょっと暖かくなれば泳げたり出来たかもしれません。

「よーし！　それじゃショッピング楽しむぞー！」
「まずはご飯でしょう！」
「うむ、ブレックファーストは大事だな」
「朝食ね」
『お！　良いねーどんな朝食なんだろ』
『楽しみだね』
『とりあえず今朝はカップメンでした』
『→泣いた』

そんな感じで目を覚ました私達はとりあえず朝食を取りにお店に行く事にしました。
海が綺麗ですねー、潮の香りがします。オーシャンビューってやつだなこれ！
そして、私達が来たのは砂浜からずっと続くようにして海上に建てられている海上レストランです。めちゃくちゃオシャレですよね、私も驚きました。
あれ？　これ、キヌッターに上げれるんじゃないだろうか？
という事で早速、ブレイバーズの皆で写真撮影をする事にしました。

「はいチーズ！」
「イェイ！」

写真を他の人に撮って私を中心に写るメンバー達。
皆それぞれ良い笑顔で写っていました、なんだか、シーちゃんだけぎこちないけど、それでも、可愛く撮れてるし問題ないでしょう。
では、早速そのレストランで朝食を取ることにどんな食事が出るか楽しみですねー。

「うわ！　みんな！　蟹だよ蟹！」
「ナッちゃんこれキングロブスターじゃない？」
「あ、本当だ」
『キングロブスター先輩！』
『生きたまま焼かれてる！』
『あのコックサイコパスやで』
『ひぇ!?』
「こらこら、やめなさい」

そう言いながら他愛ない会話を皆とやり続けながら朝食を待つ私達。
しばらくして、出てきたのはロブスターの身を油で揚げて出来たロブスターカツサンドと、ロブスターやイカなどが入った新鮮な野菜を使ったシーフードサラダだった。
おふ、こんな豪勢な朝食は見たことないですよ、写真撮ってあげなきゃ（使命感）。
こんな事してると完全に観光客っぽいですよね、私達。後、原付バイクで４９００ｍも走るなんて考えられないなぁ（遠い眼差し）。
まあ、なんにしろ、今は小休止なのでゆっくりと身体を休めたいと思いますね。
その後、私達は色々と必要な物や買い物を済ませます、この先の旅は長いですからね。

あ、ちなみに今日の昼食は焼き魚と焼き貝を皆で卓を囲んで食べました。
あれ？　私もしかしてリア充してないですかね？
あんなに憧れだった陽キャラに私がなっている！　とはいえ、本質は変わらず陰キャラなので中身は変わらないんですけども。

「見て見て、貝だよ！　貝！　デカくない？」
「なかなか卑猥な形を…ナッチーのとどっちが…」
「言わせねぇよ！」
『淫キャラになったカッピー』
『真夏の夜の陰夢』
『やっぱりホモじゃないか』
『女の子やぞ』

コメント欄は私の言葉に色々ツッコミを入れてくれます。
うむ、流石よく訓練された方達ですね、素晴らしいと思います。顔を真っ赤にしてるナッチーも可愛かったので私としては大満足です。
お酒を飲みたかったところなんですが、この後、原付バイクの運転が控えてるため一旦お預けに。
リーンさんが血の涙を流した時は肝が冷えましたね、リーンさんってあんな風にしっかりしたお姉さんに見えて結構お酒が好きなんですよ。
テンション上がっていた人が絶望のどん底に落ちるところを間近で見た気になりました。
しかしながら、次の街に行けばね少しゆっくりする余裕も出てくると思うのでそこでぜひ飲んでいただきたいなと思います。

「あーん、今日は飲めると思ったのにぃ…」
「リーンさん、次の街で飲みましょう？　ね？」
「はぁ、まあ、資金的にも今のところ早く移動していくのが無難だしね、仕方ないよ」

『リーンさんに秘蔵酒を分けたい』
『聖女殿、意外と飲兵衛なんやね』
『こうしてまた原付バイクの旅が始まるんやなぁ』

野営だとかに必要なものを買い揃えて原付バイクに跨がる私達。
さて、次の目的地なんだが、どこになるんだろう？　ちょっとナッチーに聞いてみようかな。
私は地図を広げてるナッチーのとこに近寄ると覗き込みながら彼女にこう問いかける。

「次の目的地は？」
「えーとね、次はは山の街マウンテンパレスだね」
「はぇー、マウンテンパレス？」
「そうそう、距離はここから３００ｋｍくらいかな？　多分野営も挟まないといけなくなると思う」
『あーあの街か』
『自然が綺麗よね』

次の目的地は山の街、マウンテンパレスというとこらしい。
うん、目的地はなんとなくわかったんだけども、なんでそもそも山の街に寄る必要があるんだろう？
実はそこが結構に大事な事でもある。ナッチーの言葉を聞いたリーンさんは首を傾げながらこんな事を呟き始めた。

「ナッちゃん、もしかしてだけど、山脈越えしないといけなくなるのかな？」
「うん、向こう側に行くなら避けて通れないかな」
「この時期に山脈越えだと!?かなりハードだと思うぞ!?」
『ひぇ…』
『探索隊なら任せとけよ』
『無理しちゃダメよ』

そして、ナッチーの言葉に驚いたような声をあげたのはシーちゃんである。
あ、そっか、シーちゃんは従軍経験があるから山脈越えとかもした経験があるのかな、もしかしたら。
でも、もしそうだとしてもシーちゃんがそこまで言うには何か理由があるのかもしれない、引きこもりだった私には山自体を今まで見たこともないんだけどね。
だから、ちょっとだけどんなものなのか興味がそそられる。

「よし、それじゃ皆行こうか！」
「山脈越えの話はまた後で改めて聞かせてもらうぞ？　ナッチー？」
「ええ、構わないわ、とりあえず出発しましょうか」

そう言って、全員、原付バイクに跨がると港街シーランドを後にした。
またまた、長い距離を原付バイクで走る旅がこうして始まる訳なんだけども、これはこれで慣れてきて割と楽しくなってきている自分がいる。
港町から離れる事1時間、ナッチーは原付バイクを運転したままこんな話をし始めた。

「そういやさ、視聴者の皆とかキャンプとかすんのかな？」
「冒険者が多いだろうしな、するんじゃないか？」
『溶岩流れたりしてたな』
『砂漠のど真ん中とかな』
『ワイ将、海底でキャンプしてる模様』
『みんな頭おかしくて草』
「どんなキャンプなのそれ!?　大丈夫なの!?」

そう言って、視聴者さん達のとんでもない発言にびっくりするナッ

チー、最後なんて海底とか、どうやってキャンプするんですかね？（白目）。
だけど、コメント欄では割と普通みたいな感じで皆、話をしていた。やっぱり冒険者って頭おかしくないとなれないんやね（偏見）。
さて、そうこうしているうちに日はだんだん暮れてくる訳なんですけども多分、今日は１００ｋｍくらい走ったかな？　そろそろ私達も野営をするところを決めなくてはいけなくなってまいりました。
私にとっては初めての野営って事になるんですけどね、楽しみ半分、怖さ半分って感じです。
だって女の子だけでキャンプってなんだか怖いじゃないですか、モンスターだって出ますし、前みたいな盗賊が出ることだってある訳だしね。

「おうふ、お尻が痛い…」
「結構走りましたからね」
「よし、そろそろ休もうか」
『長旅ご苦労！』
『原付バイクって意外と大変なんやね』
『そらそうよ』

丁度、小川が流れてるいい感じの場所に着いたので皆は一旦乗っていた原付バイクを止めて降りる。
結構、クタクタになるなぁ、普段から家から出ないとこういう長旅がしんどくなるものですね、もうちょっと個人的に何かしら身体を動かしておけば良かったなと思います。
すると、ナッチーは自信満々に小川の近くに立つと私達に振り返り、ドヤ顔をしながらこう告げ始めた。

「ここをキャンプ地とする！」
『草』
『言ってみたかっただけだろ』

『ドヤ顔ナッチー可愛い』
『ドヤナッチー』

なんか、急に野営地宣言をしはじめたナッチーに顔を見合わせる私達。

いや、うん、皆、そのつもりだったんだけども、そんな自信満々に言うことでもないと思うよナッチー。可愛いから別に良いんだけども。

こうして、原付バイクから降りた私達はとりあえず野営の準備に取り掛かる事にした。

野営とか初めてだからどうしたら良いんだろう？　ナッチーやシーちゃんに聞きながらやってみよう。

勇者カッピー初めて野営をする

さて、前回、野営をすることになったんだけども、まずはテントとか張らなきゃいけないよね。

というわけで私はひとまず、見様見真似でナッチー達から説明を受けながらテントの設営を手伝っていました。

肉体労働ってきついっピ！　けど、これはこれでなんか皆との共同作業で楽しいのは楽しいんだけど。

そんな中、テントの杭を打っていたナッチーはこんな口をこぼす。

「あーあ、もっと楽にキャンプが出来たら良いんだけどなぁ」

「まあ、これが野営というやつだからな」

「ご飯も作らなきゃいけないし、火起こしもやんないとじゃん、身体はクタクタだし、原付バイクで」

『気持ちはわかる』

『キャンピングカーとかあれば便利だけどね』

『サバイバルの醍醐味よ』

そう言って、ナッチーの言葉に同意するコメントやそれも楽しみの一つであるというコメントが返ってくる。

確かに、アウトドアな人ってこういうのが楽しかったりするんだろうけどね、何というか大自然の中で過ごすのが心地いいとかって感じる気持ちは私もわかるな。

しかも、共感できる人が周りにいるのも楽しみの一つかもしれない、こういう事ってやっぱり仲間と共感する事で思い出になったりもするもんね。

けど、確かにもうちょっとナッチーが言うように楽にキャンプ出来たら良いとは私も思うところではある。どうにかならかいものか。

そんな事を考えていると、ふと、ある事が頭を過ぎった。

そうだ！　せっかくだし！　試してみよう！

「ん？　どったの？　カッピー？」
「ちょっと待ってて!!」

そう言って、私は原付バイクに跨るとヘッドホンを付けてコメント欄を漁り始める。
えーとね、確か、ここらへんにコメントが残ってるはず。
私はそのコメントを見つけると、すかさず、目の前に出現してるデジタル画面を指でタッチしてそのコメントを選択する。
私が選択したコメントは『キャンピングカーとかあれば便利だけどね』というコメントであった。
確か、女神様の話によるとこのやり方でよかった筈だけどどうなんだろう。
すると、私が跨っていた原付バイクがガシャガシャと音を鳴らせ始める。

「おわ！　なんだなんだ！」
「あらあら、どうしたのかしら？」
「カッピー、何したんだお前!?」
「あわわ！」

すかさず、変な音が鳴りはじめた原付バイクから離れる私。
すると、その原付バイクはガッチャンガッチャンとまるで変形ロボットのように変身していくではないですか。
その驚くべき光景に私達全員、唖然とした表情を浮かべながらそれを見守ります。
それから、しばらくして、変身しはじめた原付バイクはなんと綺麗でデカいキャンピングカーに変身してしまいました。

「うわ！　凄っ！　なんじゃこりゃ！」
「あらあら！　こんな魔法、初めて見ましたわ！」

「げ、原付バイクが…キャンピングカーに…!?」
『はえー最近の原付すげーな』
『やば!』
『プッピガン!』
『え？　これ、ロボットになんじゃね!?』

ガッシャン!　と突如として現れた原付バイクに目を輝かせる私達。
まあ、すんごいよね、綺麗な新車ですよしかも、早速、中をご開帳してみることにします。
中はより広々としていました。キャンピングカーとしてはもう素晴らしいですよね、キッチン、トイレにシャワー付き、さらには荷物を置けるスペースまであります。
あれ？　これもう他の原付バイクいらないんじゃね？

「でかしたカッピー!」
「これで、原付バイクでずっと走らなくても済むな!」
「わ、私のスーパーカブで大陸横断の夢が…」
『原付バイク（原材料）だからいいんじゃね？』
『原付バイクとは？』
『涙目カッピー可愛い』

私の原付バイク大陸横断の夢はなんと三日で潰えました。
幸いな事に、なんと、ナッチーとリーンさんは車を運転できるそうで、キャンピングカーでの移動はなんの心配は無いとか。
いや、そうじゃないねん、企画がぶっ壊れてしまったんですよ、ブレイバーズのね。
まあ、でもテント建てるよりは過ごしやすい家がこうして出来たわけなんですけども。
なんやかんやで、テントを作る手間が省けたからオーケーなんですかね？　知らんけど。

「よし、じゃあご飯作るか！」
「よ！　待ってました！」
「ふっ、ご飯といえば私の出番か…」
『お、なんだ？』
『おや…カッピーの様子が…』
『やめろー！　カッピーを止めるんだー！』

そう言って、いつの間にか着替え終わっている私の姿に賑わいを見せるコメント欄。
ナッチーはそんな私の姿を見て、また何やってるんだろうね、このアホの娘はみたいな眼差しを向けてきていた。
ふふふ、食事係といえばこの私しかいまい。
一人暮らしで身につけ、幾つもの食事を作りあげた腕前を今、披露する時！

「皆さまお待たせしましたシェフカッピーでございます」
「いや、呼んでない呼んでない」
「そこはかとなく嫌な予感がするんだが」
『草』
『何生き生きしてんだｗ』
『料理の破壊者の間違いでは？』

コメント欄は草を生え散らかしてました。
それに対して、私はあんまりの扱いにこれは反論せねばと思いましたね、この服意外といい値段したんだぞ！
ちなみにシーランドで買いました。いやー、やっぱり買っといてよかったわ、この衣装。

「おい！　私がご飯作るんだぞ！　女の子が作ったご飯はな、よっぽどじゃないと不味くないんだよ！」

「あんたの視聴者が言ってるんだから座っときなさいって」
「もう止められんぞ！　見てみろよこの格好！　ここまでしてんだから！」
『おい誰か止めろｗ』
『カッピーがイキリはじめたらダメだｗ』
『フラグが盛大に立ちました』

お前ら何という扱いか！　私はね、この時を楽しみにしてたんですよ。
リーンさんやシーちゃんは意気揚々と張り切っている私とナッチーとのやりとりがよほど面白いのかゲラゲラ笑っていた。
何笑ってんだよぉ、気を付けろよ？　お前らもうすぐ笑えなくなるからな。
さて、それじゃ早速キッチンにナッチーと入る私。

「では、シェフカッピー、今日は何を作るんでしょう？」
「あー…ねー…、非常に言いづらいんだけども、決めてない」
「あんだけ啖呵きっといて？」
「うん」
『草』
『この娘はもうｗ』

そうナッチーに答えると、ナッチーもそれがツボだったのか笑いはじめた。
いやだってよ、この格好だってさっき思いついたんですもの、外からも会話が聞こえてたのか、リーンさんとシーちゃんの笑い声が聞こえてくる。
まあ、そうこうしていてもね、料理は始まらないんで、早速ね、やっていこうかなと。
「ほんじゃね、まずこの豚肉を使います」

「ほうほう、まあ、普通ですね」
「これをね、一口サイズに切っていくんですよ」
『賢い』
『おや、意外に普通？』
『いや、まだ始まったばかりだからわからん』

そう言って、豚肉を包丁でカットしていく私。
まあ、一人暮らししてたもんでね、ある程度の料理をするのは得意なんですよ、ふふ、皆、私を甘く見てましたね。
下味をつけて、とりあえずこれで豚肉はよし。
さて、続いての料理の作業に移るわけなんですが。

「あのね、私、今日シェフの格好をしてることもありまして、せっかくなのでそれらしい料理を作ろうと思ってます」
「あ、いや、難しい料理はしなくていいのよカッピー？」
「しようと思います」
『話聞けやｗ』
『念押して二回いうんじゃねぇよｗ』
『悲報、カッピー暴走』

というわけで、私が次に取り出したのは何とレストランでよく使われているフランベ用のブランデーを出します。
ほら、お前らも見たいだろう？　フライパンから火がボァ！　ってなるところ、見せたきゃ見せてやるよ！
早速、シーランドで買ってきた魚介類を使ってみたいと思います。魚料理だぞ、喜べ！
なんと買ってきたのはナックシャークです。
脂が乗ってるんですけども、こいつを使ってね、いきたいと思います。

「カッピー何これ、デカくない？」

「サメです」
「え…？」
「サメです」
『サｗｗｗメｗｗｗｗｗ』
『サメを食う女』
『大事な事なので二回言いました』

そういうわけで、先ずは醤油・砂糖・みりんで照り焼きソースを作ります。
その後、サメを切り身にしていきます。まあ、なかなか良いサイズに切れたかなと、サメは既に解体してもらってますので外したヒレはフカヒレに使いますね。
さて、それではサメの切り身をフライパンにドーン！

「おー！　いい感じ！　ほら！　旨そう！」
「見た感じまともね」
「じゃあ照り焼きソース入れまーす」

そう言って、サメの切り身に照り焼きソースをかけていきます。
後は炒めて、程よい感じになってくるのを待ちます。さて、皆さん、ここでお待ちかね、フランベのお時間が近づいて参りました。
ナッチーは不安そうに私の服の袖を掴みながら涙目になっている。

「大丈夫よね？　大丈夫よね？　カッピー」
「やるよー！　やるよー！　見てろよー！」
『ナッチー涙目ｗ』
『おい誰だこいつに料理やらせたのｗ』
『放　火　魔　の　眼　差　し』

そして、フライパンに私はブランデーを投入。
※良い子は危ないので絶対真似しないでください。

フライパンからブワァ！　と火が立ち上り、私とナッチーは思わず今まで発した事が無いような悲鳴を一緒に上げてしまいました。

「うお!?　酒入れすぎたァ!?」
「この馬鹿！　お馬鹿！」
「ちょ!?　何やってるんだお前らは」

そう言って、思わず外から見ていたシーちゃんは笑いながら助っ人にやってくる。
いやー、いい感じで火がボワァってなったんだけどね、調子に乗りすぎた。まさか、ここまで火力上がるとか思わなかったンゴ。
一方でコメント欄は爆笑の渦に包まれていた。そりゃそうだよね。

『クッソワロタｗ』
『シェフカッピー（笑）』
『草』
「仕方ないわねーもう」

一方で、リーンさんはその光景を面白がりつつも火の勢いを抑えるように魔法を使って鎮火に努めてくれた。
ちなみに私、今回、フランベ初挑戦でございます。
良い子はちゃんとした手順でちゃんとした人から教わるようにしましょうね、後、換気は大事です。
さて、シェフカッピーのお料理は後半へ続きます。

勇者カッピー実食する。

さて、料理は後半戦へ。
私は前回フランベに挑戦したんだけど、まあ、結果はご存知の通りです。めちゃくちゃ炎上しました。
まさか、物理的に炎上するなんてねぇ、炎上したのはフライパンなんですけど。
後は簡単な野菜炒めを作りました。こちらは特に問題なかったですね、だって下味をつけて豚肉炒めて野菜を加えて作るだけでしたからね。
そんなこんなで四人前作った料理を机に運びます。
私の自信作です。片方だけサメの照り焼きとかいうとんでもない代物ですけど、味は多分、大丈夫な筈です(ちょっと焦げてますけど)。

「実食!」
『うーん、この』
『火事になるとこやったな』
『火遊びはメッやで』
「全く皆が言う通りね」
「ポンコツだからな」
「そういうとこもカッピーちゃんの可愛さよね」

皆からは辛辣なコメントと言葉が飛んできます、当たり前なんだよなぁ、ごめんなさい反省してます。
そして、リーンさん、よくわかってらっしゃる、結婚しよ。
冗談はさておき、見栄えは良いとは思います、見栄えはね、味も一応、試食しながら料理をしたんである程度は保証出来るかと。
サメを料理したのは初めてですけどね、私頑張ったよ皆。
これは、私の料理チャンネルを作っても良いかもしれない、こう見

えて料理するのは大好きなのです。
私が作ったサメの照り焼きを口に運ぶ皆さん、そのお味は？
「う…ん、美味しいのは美味しいのだけど」
「カッピーちょっと焦げてる」
「だな」
『うん、燃えてたしな』
『けしカスにならなかっただけマシ』
『カッピーエ…』
「な、なんだよう！　美味しいなら良いでしょう!?　美味しいなら！」

そう言って反論する私に皆からジト目が返ってくる。
うん、ごめんなさい、調子乗りました次は気をつけます。でも、野菜炒めは真面目に作りましたからね！　そっちは多少マシな筈です。
それから、皆さんは野菜炒めを口にします。すると、先程とは打って変わり、目がキラキラしていました。
なんだ皆して、しいたけみたいな目しやがって。

「美味しい！　カッピー！」
「ふふん！　でしょう？　そうでしょう！」
「普通の料理の方が美味しいという衝撃の真実」
「んなっ…!?」
『変に背伸びするから…』
『お詫びにパンツ脱げ』
『おっぱい揉んでもらえ』
「辛辣すぎでしょう!?」

流れてくるコメント欄にツッコミを入れる私。
いやいや、セクハラに特化しすぎです。誰得なんですか、私のセクハラされるシーンなんて。
皆さん、もうちょっと紳士的にいきましょう、変態紳士なら問題無

いとかは聞いてないです。
さて、それからしばらくして皆さん完食しました、いやはや、美味しかったですね、色々ありましたけど。

「さて、じゃあ、シャワー浴びようかな？　誰から入る？」
「じゃあ私から先に頂いて良いか？」
「良いよー」
『カメラは持った』
『ハァハァ』
『よし俺も入ろう』
「はーい、皆はお外で待機しましょうねー」

そう言って、カメラを外に出すリーンさん。
うん、見せるわけ無いだろう、このチャンネルが吹き飛んでしまうわ。女の子のいやらしい姿を簡単に拝めると思ったら大間違いだぞ諸君。
まあ、というわけで、その後は適当に話をしながら今日の配信を終了しました。
ここからはプライベートだからね？　女の子のプライベートは見せられ無い事だってあるんです。
しばらくして、シャワーから上がってきたシーちゃんは綺麗な金髪の髪を拭きながら、Tシャツに薄いピンクのパンツというラフな格好で出てきた。
おいおい、女の子だけだからといってラフすぎですよ、スタイルが良いので余計に色っぽく見えます。

「あー…さっぱりした」
「ねぇ、シーちゃん、下は履きなさいよ下は」
「女だけなんだから別に良いだろ」

ナッチーが言ってもこの返しである。とはいえ、ナッチーも普段か

ら家ではこんな格好をしているためか、それもそうね、と言ってあっさり引き下がってしまった。
プライベートだらしない女の子多すぎでしょう、私も含めてですけども。
しかしながら、女の子同士とはいえ、他の人と一緒に過ごすのって緊張しますよね。

「じゃあ！　カップル！　一緒にシャワー浴びよう！」
「うぇ!?」

だから、こんな爆弾をいきなり打ち込まれて動揺してしまう私は何にも悪く無い筈だ。
い、一緒にシャワー浴びるなんて聞いてない！　思わず変な声が出てしまいましたよ！
女の子同士とはいえ、いかがなものか？　ん、でも普通なのかな？
わからん！　今まで引きこもって来たから一般的な常識的にどうなのか全くわからん！
動揺する私にナッチーはニコニコしながら、服の襟を掴みズルズルとシャワーに連行していく。

「あっ！　待って！　心の準備が…っ！」
「大丈夫大丈夫！　先っちょだけだから」
「何が!?」

ナッチーの格言、先っちょなら問題ない。
もう定着しつつありますよね、私はなされるがまま引きずり込まれるようにキャンピングカーにあるシャワー室に連行されていきました。
いや、別に一人ずつで良かったと思うんですよね。
リーンさん、一人で落ち着いて外でコーヒーを飲まずに助けてくださいよ、貴女の妹ですよ!?

そんなこんなで服を脱がされた私はナッチーと一緒にシャワーを浴びる事になりました。
というか、スペース的に二人入るとやっぱり少し狭いような…。
そんな事を考えてる中、ナッチーは私のある部分を見て目をキラキラさせています。

「うわぁ…カッピー大っきい…」
「あ、あんまり見ないで…」
「まあまあまあ」
「あっ…！　さ、触るのは…っ！　ん…！　そこは敏感だからっ！」

きっとシャワー室からは姦しい声が聞こえて来てる事でしょう。
シャワーを浴び終わり、先に上がったシーちゃんはキャンピングカーの中にあるソファに腰掛けたまま、雑誌を開いたままシャワー室の方を見つめる。
そして、私の溢しているいやらしい声に呆れたようにため息を吐き、こう呟いた。

「何やってるんだあいつらは…」

そうだよね、私もそう思う、それからは何というか洗いっことかいうナッチーの意味のわからない提案のせいでセクハラが過激化したことはいうまでもない。
うん、何か大切なものを失ってしまった、そんな気がします。
というか私が意図した事ではないですからね！　なんもかんもナッチーが悪い。
そんな感じで、シャワーから上がった時には私の目は死んでました。

「あー気持ちよかったー！　また入ろうね！　カッピー！」
「…う…うん…」

可愛い熊さんのパジャマに着替えた私はツヤツヤな顔でシーちゃんと同じようにTシャツに白い刺繍の入ったパンツ姿のナッチーに答える。
というか、ナッチーもシーちゃんのことなんも言えないやんけ！
Tシャツにパンツ姿って！
女の子に幻想を抱いている皆さん、見てください、これが女の子の実態です。
あ、配信切ってるから見れなかったね、すまんな。
さて、そう考えていた私なんですけど、この二人のだらしない姿をリーンさんがさらに越えてくるとは思いもしませんでした。
最後にシャワーが終わり、出てくるリーンさんでしたが、その格好はなんと。

「ふぅ…シャワー頂きました」
「ちょ!?　リーンさん！　服！　服ぅ！」

全裸で出て来たのです。いやいや、いくらなんでもそれはぶっ飛びすぎです、せめて何か履いてください。
そんな反応を私がしてると、首を傾げたナッチーは私にこう告げて来ました。

「え？　お姉ちゃん、家ではいつもこんな感じだよ？　まあ、寝る時はパンツとブラは付けてるけど」
「あのさぁ…」

私はナッチーの返答にカクンと頭を落とす。
何にもおかしくないみたいな感じで答えないで！
ここ家ではないんですよね、一応、キャンピングカーなので、もしかしたら他の冒険者の方とかに出会したらどうするつもりなんですかね本当。

リーンさんはその後、下着を付けてはくれましたが、上下紫の下着は攻めすぎだと思います。誰に見せるんですかね？

そんなこんなで、私達の騒がしい初めての野営の夜は過ぎていくのでした。

勇者カッピーパンツが爆発する。

さて翌日。
昨晩はいろいろありましたが、朝を迎えました。
キャンピングカーって快適ですよね、トイレもあるし、四人の共同部屋みたいだから楽だしね。
さて、出発といきたいところなんですけども、このキャンピングカーで移動するなら残りの原付バイクをどうにか収納しなくてはいけません。

「またコメントでお願いしたら？」
「そうだね」

とか思っていましたけど、ナッチーの起点を利かせてくれた案でキャンピングカーに何と原付バイクを収納できるスペースを新たに視聴者さん達に作ってもらう事にしました。
サンキュー視聴者、フォーエバー視聴者。
という訳で、三人の原付バイクを収納して、私達が乗るキャンピングカーは山の街、マウンテンパレスに向かい出発。
いやー、キャンピングカー楽ちんだね、尻が痛くならないもの、女の子にはお尻のダメージは重大ですよ。

「…貴女は深淵を覗いてしまった。ＳＡＮチェックです」
「ぬあー！　発狂はだめー！」
「わ、私が応急処置でなんとか！」
『草』
『まさかのＴＲＰＧｗ』
『ナッチーのキャラ後ＳＡＮ値２０やんけ！』
『新しいキャラシー書かなきゃ』

そして、私達が何してるかというとＴＲＰＧで遊んでます。
もちろん、運転はリーンさんに任せきりってわけではなくてシーちゃんが交代とか、時には休憩をしながらですけどね。
流石に一人で運転させっぱなしなんて事もあれなんで、しばらくして思いついたキャンピングカーにオート運転手とかも視聴者さん達にお願いして付けて貰いました。
そんな感じで、私達は時間を潰しながら目的地に向かってる最中です。テレビゲームもキャンピングカーで出来るとか神か！
こんなん知ってしまったらもう原付バイクに戻せないですね、あ、ニートとか呼ばないで!?　引きこもりではないですから！

「ふふん、さあ、どっちがジョーカーかな？」
「ぐぬぬぬ…」
『カッピー！　右やで右！』
『いや、左だ！』
『上からくるぞ！　気を付けろ！』
『したかもしれない』
『中だ！』
「ややこしいわ！　というかカード１枚だけなんですけど!?」

私を惑わせてくる視聴者さん達に声を上げる私。
いや、中とか上とか挙句に下なんて、どこにあるんやカード。
そんなにカードあったらババ抜き永遠に終わりませんよ！　クソっ！　こんな時、迷ったら左を選べってどっかの誰かさんが言ってた気がする！
よし！　決めた！　私は左を選ぶぜ！

「おらぁ！」
「はいどーん」
「ぶふぉ」

『草』
『期待を裏切らない』
『カッピーの引き運に脱帽』

カードを引いて中身を見た瞬間、私は絶望して打ちひしがれた。
引いたカードはお察しの通り、ジョーカーです、なんでや！　今のは普通に行けた感じがしたのに。
ナッチー強すぎんよー、さっき、ＴＲＰＧで意地悪し過ぎたからかな？
でも、リーンさんがそれ以上に強い、必ずと言って良いほど１番に上がるのだ、この人、本当に聖女の生まれ変わりなのではないだろうか？
さて、そうこうしているうちにキャンピングカーがいきなり急ブレーキをかける。

「うわ！　何!?」
「びっくりした！」
『なんだなんだ？』
『どうしたんだ？』
『いきなり止まったな』

私達は自分達の武器を手にキャンピングカーから降りて外に飛び出す。
すると、そこには巨大な二足歩行の竜が立ち塞がるようにして道を塞いでいた。
あ、あわわ、なんじゃこいつ！　ドラゴンなのか！　デカ過ぎでしょう！　しかも羽付いてないし！
武器を構えたナッチーは忌々しそうにこう呟く。
「げぇ…ギラノニクスの縄張りだったのか、この辺」
「ロンスタ映えしそうなドラゴンだな」

「あ、あわわ、どうしよ…！」
「大丈夫よ！　一体だけなら！」

そう言って、武器を構える皆さん。
そうだ、私もコメントで武器を貰って援護しなきゃ！　早速、視聴者の皆に武器をお願いしよう！
そう思った私は、前線で戦っている皆を他所にこの映像を見てる視聴者の皆に助けをこう。

「皆！　力を貸して！　私に武器を！」
『爆発するカッピーのパンツ』
『爆発するカッピーの今、穿いてるおパンツ』
『伝説のカッピーのブラジャー』
「鬼か!?」

しかしながら現実は非情である。
皆はなんと武器を寄越せと言ったにも関わらず、この緊急事態に私の下着を爆発物にすべく、皆さんは一斉に私の下着を指定して来ました。
というか、なんでこんな時だけ統制が取れてるんですかね!?　えぇい！　時間がない！　仕方ないです！
そして、私が選んだのは『爆発するカッピーの履いてるパンツ』でした。
私の穿いてるパンツに違和感を感じますが、仕方ないですね、やったの私ですから。

「ぐわぁ！」
「ナッチー！」
「ナッちゃん!?」
『ナッチー!?』
『テメェ！　クソ竜！　ぜってぇ許さねぇかんな』

『ちょっと今からギラノニクス狩ってくるわ』

ギラノニクスの尻尾の振り払いにより、吹き飛ばされ、木に叩きつけられるナッチー。

この際、しのごの言ってられませんね、私は自分が穿いている薄いピンクのパンツを脱ぐと、それを手に持ち、ギラノニクスに向かい走り出します。

ノーパンで走っているので、下がスースーしますが、友達がピンチなのにそんなのは構ってられません！

「皆さん！　下がってください！」
「!?　…了解！」
「わかったわ！」
『カッピーがパンツを脱いだ！』
『爆発物と化したパンツ』
『戦闘中にパンツを脱ぐやばい女』
『カッピーがノーパンだぞ！』

私がパンツを脱いだ事で歓喜に湧く視聴者さん達。お前ら、後で覚えてろよ！

一方で吹き飛ばされナッチーを肩で支えて二人は前線から離れます。

よし、周囲の安全を確保できた！　これなら問題ない！

そして、ノーパンの私は手に持っているパンツを大きく振りかぶると立ち塞がるギラノニクスに向かい思い切り投擲しました。

「グルオオオン！」
「食らえー！」
『パンツが飛んだ！』
『いけー！　カッピーのパンツ！』
『ノーパンでパンツを投げる女』

私が投げたパンツは宙を舞い、しばらくして、ジェット噴射し始めるとギラノニクスに向かって一直線に飛んでいきます。
そして、直撃した私のパンツは凄まじい音を立てて大爆発を起こしました。
私はパンツの爆風で吹き飛ばされますがすぐにシーちゃんが私の身柄をキャッチして、クッションになってくれたおかげで衝撃を和らげてくれました
だれだ、こんな武器考えたやつ、頭おかしいんじゃないのか!?
私の穿てるパンツにどんだけ火薬詰め込んだらあんな爆発するんだよ！　だいぶ頭ぶっ飛んでるだろ！
私はすかさず、スカートを押さえて顔を真っ赤にしながらギラノニクスがいたところを見つめます。
ギラノニクスの身体は私が投擲したパンツの爆発によって木っ端微塵に吹き飛んでました。

「…お前、なんてランジュリーを穿いてるんだ」
「いや！　私だってあんな爆発するパンツ穿いてたら怖いわ!?　下半身ぶっ飛んでしまうわ！」

シーちゃんの戦慄したような顔に私は思わずツッコミを入れる。あと、素直にそこは下着って言ってよ！
私とて、穿いてたパンツが視聴者から爆発物にされた挙句、ノーパンを強要され、挙げ句の果てにパンツを失った挙句に大爆発したんですからね。
むしろ、可哀想なのこの場合、私でしょう！
しかも、下半身がスースーするし、このまま人前には出れないです。
とりあえず、私はキャンピングカーにあるパンツを穿いて事なきを得ます。いや、これ、戦闘中に下が見えてたら放送事故だし、私お嫁にいけなくなるから（絶望）。
ナッチーは気絶はしてるみたいだけど、怪我は大した事なかったみ

たいでとりあえず安心した。
今日のＭＶＰが爆発した私のパンツなんてとてもじゃないが、気絶したナッチーには言えないな。
クソ、この恨み晴らさぬおくべきか。

「もうゆるさねぇかんな！　ナッチーが起きてくるしばらくの間、クッソ濃厚なＢＬ本の映像を流します、しかもボイス当ててやるから覚悟しろよ」
『ぎゃあ⁉』
『ゆるして…ゆるして…』
『俺は悪くねぇ！　カッピーのパンツが勝手に爆発したんだ！　俺は悪くねぇ！』

こうして、私はナッチーが目を覚ます間、私のパンツを爆発物にした視聴者の皆さんにゴリゴリマッチョなお兄さんが絡み合うめちゃくちゃ濃厚なＢＬ本の映像を流すと共に、私と面白がったリーンさんがボイスを当てるという地獄を皆さんに味わってもらう事にしました。
流石に視聴者全員にビンタとかはできませんからね、これでも百歩譲っての譲歩だと思います。
それから、動画には視聴者の阿鼻叫喚としたコメントが流れっぱなしだったとか、まあ、皆さん自業自得ですね。

勇者カッピー山の街に着く

さて、私をノーパンにしやがった視聴者さんに向けてクソ濃厚なBL本の音読を聞かせてあげた私なんですけども、朗報です、ナッチーが目を覚ましました。

もちろん、傷の手当てはしなくてはいけないのでしばらくは安静にしてもらわなきゃいけないんですが、それにしても大事にならなくてよかった。

まあ、そんなわけで私達は再びマウンテンパレスを目指して旅を続けている最中です。

「まあ、仕方ない、そろそろ許してあげますかね」

『おぇ……』

『ホモに目覚めたぞ、どうしてくれる』

『まずウチさぁ、屋上あるんだけど焼いてかない？』

コメント欄もなんか心なしかさらに気持ち悪くなってるような気もしない事はないんですが、多分、私は悪くない。

ナッチーはため息を吐くと、傷口のところを確認する様に触っている。

背中から叩きつけられてましたからね、本当にあれは痛そうでした。

「跡つかないかなぁ……、痛っ……」

「多分、大丈夫だと思うわよ、ナッちゃんは丈夫な妹だから」

「まさか、カッピーのパンツに救われるとはねぇ……」

「その事には触れないで！」

『草』

『パンツで世界を救う女』

『パンツを投擲するぶっちぎりでイカれた女』

ナッチーはいやらしそうな笑みを浮かべながら私にそう告げてくるので、私はとっさに顔を赤くしながら声を上げます。
コメントが相変わらずすぎる。私に厳しい、ブレイバーズの視聴者さん達よく訓練されてますね、本当に。
いや、悪い意味でですけども。
あれは完全に私の中で黒歴史となってしまいましたので、触れてはいけないものです。
戦闘中にパンツを脱いで投擲するぶっちぎりでイカれた女とか言われたんですよ！
誰が好き好んでノーパンになると思ってるんですか、しかも投げたパンツは爆発四散してもう戻ってはきませんし、本当に最悪ですよ。

「とりあえず、目的地はボチボチって感じだよね」
「そうだな」
「ねーねー着いたら何する？　スキーやスノボとか？」
「山だからねぇ、川とかもあるから！」
「遠足かっ！」
『皆ウッキウキで草』
『山荘で殺人事件とか？』
『山越えなら防寒着いるよね』

ワイワイと何やら旅行雑誌みたいなもので話し合ってる皆に突っ込む私と草を生やす視聴者さん達。
もうね、本当遠足気分ですよ、スキーとかするとか言ってますし、まあ、私もやった事ないから興味はあるんですけど。
運動音痴の私が果たしてスキーやスノボができるかどうか不安なとこですね、緊張しちゃうな……って遊びに行く気分になってたいかんいかん。
そんなこんなで、私達が話していると目的地であるマウンテンパレ

スの街が見えた。

「おー……着いた！」
「街が山の麓に建ってる！」
「壮観だな！」

マウンテンパレスの外観は大きなグラナダ山の麓に街が立ち並び、自然と一体感のある風景を作り上げているようだった。
私もこんな自然の光景を見るのは初めてだったのでちょっとテンションが上がります。いやはや、引きこもったままだと絶対見れなかったなこんな光景。
ひとまず、キャンピングカーから降りた私達は宿を探す事にした。
とはいえ、マウンテンパレスは観光地でもあるので割と早く見つかるのは見つかりましたけどね。

「いらっしゃい、四人ですか？」
「はい！」
「では、角を曲がった奥の部屋になります。鍵をお渡ししますね」

受付の可愛いお姉さんから鍵をもらい早速部屋へと向かう私達。
どうやら、四人で一部屋らしいけど、どんな部屋なのか気になるところだ。
前のシーランドのときは二人一部屋で別々だったからね、一部屋で済むならだいぶ経費的にも浮くし、財布に優しい。

「あー、やっとゆっくりできるー」
「とりあえず防寒着買いに行かなきゃな」
「そうねぇ、ちょうど来るときにいい感じのお店は見かけたわ」
「それじゃそこで買おうか」
『防寒着かぁ……』
『この時期はかなり冷え込むからな』

『オススメの防寒着のソース貼っとくわ』
「あ、本当に！　助かるー！」

そう言って、わざわざ私達のためにオススメの防寒着を教えてくれる視聴者さん。
こういうのは本当に助かるよね、私達はどちらかというと山は素人だし、山越えもシーちゃん以外は皆初めてだからこんな風に紹介してもらえると買い物もしやすい。
さて、というわけで買い物をしにきたわけなんですけど、私達はそれぞれ、似合いそうな防寒着を選びながらオススメされた種類の服を試着していた。

「どうよ！　これー！」
「暖かそう！　可愛いねー！」
「こっちも良くないか！」
『こう見ると普通の女の子なんやねって』
『普通とは？』
『パンツを爆破したりウィリーするのは普通だった？』
『女子力（破壊力）』
「それはやめい!!」

キャッキャと皆で服を選んでる中、私の女子扱いに疑問を出し始めるコメント欄にツッコミを入れる。
まあ、最近は確かにちょっと女子らしい事はしてなかったかなとかは思ったりはしたけれど、私とて女の子なんです。
可愛い服は着たいし、甘い食べ物は大好きだし、恋話は……いや、恋人はね……私の恋人はＰＣだから（震え声）。
とにかく、女の子扱いされてしかるべきなんですね、はい。

「よーし、とりあえず防寒着はそれぞれ買ったね！」
「おー！」

そうして、それぞれ防寒着を選び買ったことを確認するナッチー。
私は可愛い水色の防寒着を買いました。ウサギさんの絵がありましたし、デザインも可愛らしかったんで。
皆さんはそれぞれ、ナッチーは黄色、シーちゃんは緑、リーンさんは紫って感じでそれぞれイメージに合った色を購入したようです。皆さん似合ってましたしね。

「じゃあ、次はせっかくだし、スノボとかスキーしに行こうよ！　キヌッターにも載せたいし！」
「賛成だな！」
「あ、あの！　私、初めてなんだけど……」
「大丈夫大丈夫！　私が教えるって！　行こう行こう！」

そうして、防寒着を選んだ後は、皆でお待ちかねのスキーに行く事に。
なんでも、グラナダ山の雪が積もる場所は滑るのには最適でその場所をスキー場にしてあるので、綺麗なゲレンデがあるとか。
何にしろ楽しみですね、せっかくなので皆と楽しみたいと思います。

勇者カッピースキーをする。

さて、私たちはマウンテンパレスのスキー場にやって参りました！　見てください！　この広がるゲレンデを！　うん、真っ白で目がチカチカする。大自然は感じるけど酸素が少ないような気もしない事はない。

とりあえず、私たちは早速、スノーボードを借りて滑ることにしました。

スキーでもよかったんですけど、やっぱりスノボでしょ！　というのはパリピのナッチーの意見です。

「手を離すなよ！　絶対離すなよ！　絶対だぞ！」
「え？　カッピーそれ振り？」
「おーい！　早く滑ってこいよー！」
『カッピー芸人枠ｗ』
『身体張る芸人かな？ｗ』
『スノボでビビる勇者ｗ』

下から滑り降りたシーちゃんが手を振ってくる中、私のへっぴり腰に笑いが溢れるコメント欄。

う、煩いよ！　だって初めてだし！　私、先日までバリバリの陰キャラだったんだよ！

それをさ！　こんな寒い山の中で木の板一枚でクッソ高くて長い坂を降ろうってしてるんだよ！　怖いに決まってるだろ！

足が小鹿みたいにプルプルしてるのを見ているナッチーは何故か微笑ましく生暖かい眼差しで見つめて来ますしね。

やだ！　そんな目で見ないで！　私を見ないで！

あ、なんか、それっぽい事を思い浮かべてしまった。

「あっ…」
「あー！　ナッチーなんで手を離して！　あ、あわわわ！　うわー！」
『カッピー！ｗ』
『カッピー暴走モード突入』
『アカン』

ナッチーが気がついたら手を離していたせいで私はそのままズザーっと勢いよく坂をスノーボードで降っていきます。
速い怖い！　あー！　誰か止めちくりー！
そんな時だ、私の目の前に巨大な雪だるま人形が出現し、ポヨンッと私の勢いを受け止めるとそのまま私はゲレンデに顔面から転ける。

「ぐぇ」
『ぐぇｗｗｗ』
『女の子が出したらあかん声出しとるぞｗ』
『潰れたカエルかな？』

バタンッと倒れた私にツッコミを入れてくる視聴者さん達。
痛い、冷たい、これが自然の厳しさか、鼻が痛いです。鼻血は出てないみたいですけども。
とりあえず、止まるのは止まりました。ふぇ、怖かったよぉ、いや、本当、冗談抜きで。
さっきからズザァっと簡単にシーちゃんとかナッチーとか滑ってるけど本当にどうやって滑ってるんだあの人達。
すると、転けた私の元に心配そうに駆けつけてくれるお方がいらっしゃいました。そう、我らが聖女リーンさんです。
職業、魔法使いなんですけどねこの人。

「大丈夫？　カッピーちゃん？　魔法を使って咄嗟に止めたけれど怪我はない？」
「は、はい…助かりました…怖かったですぅ」

「ヨシヨシ」
『リーンママァ』
『あら^～』
『キマシタワー』
『僕も怪我ちたのー』
『→唾でも付けとけ』

リーンさんの母性に湧くコメント欄。
テメーらには絶対リーンさんはやらないからな！　これは私達のお母さんだ！　…まあ、ナッチーのお姉さんなんですけども。
何故、皆、母を求めるのか、そんな事言ってると全員、赤いヘルメット被った不審者になりますよ？　そんな人は修正されちゃいます。
さて、話がだいぶ逸れちゃいましたけど、リーンさんからナッチーはメッ！　と怒られてました。
うん、怒り方も可愛いから全然怖くないんですけどね、ナッチーも謝って来てくれたから許します、可愛いので。
そんなわけで、私はとりあえずリーンさんと一緒に滑ることになりました。
こう見えてリーンさんは私達の中でも群を抜いて滑るのが上手いんですよね、なんでも、ナッチー曰く、昔はスノーボードを趣味でやっていたとか。
なるほど、だからそんなにスイスイ滑れるのか…羨ましい。
「カッピーちゃんは初心者だから仕方ないわよ、でも、私がしっかり教えてあげるから心配しないで？　ね？」
「リーンさん、ありがとう…」
「ふふふ、よーし、なら最初から教えるからね…、まずはスノーボードの止め方なんだけど」
そう言って、教えつつも私の手をしっかりと握ってくれるリーンさん。

本当に教え方も優しいですし、丁寧ですね、流石、普段からクッキングチャンネルなどの教えるチャンネルで話をよくしているだけはあります！

私としても頑張ってリーンさんの指導に応えないとと奮起して頑張りました。

ある時は転け、さらに転け、たまに後頭部を強打する様に転け。

「カッピーちゃん、頑張って！」

「ぐ、ぬぬぬ…。こ、コツは掴んできました」

『頑張れ！　カッピー！』

『なんか応援したくなる』

『もうすぐで滑れるぞー！』

いつしか、コメント欄の皆も応援してくれるようになりました。

なんだか、暖かいですよねこういうの、昔なら私が頑張っている姿なんて嘲笑れて馬鹿にされて来たのに、こんな風に誰かに自分が応援されるようになるなんて夢にも思っていませんでした。

そして、そんな皆の頑張りに応えようと頑張った数時間後。

「はあ、はあ、や、やった！　滑っても転けなくなりました！　転けずに滑り切りましたよ！」

「凄いわ！　カッピーちゃん！」

『よくぞここまで！』

『運動音痴やったのにな…』

『アカン…涙出てきそうや』

皆さん、私が頑張って滑れるようになった事を一緒に喜んでくださいました。

私も思わず、目頭が熱くなります、今まで、こんな風に何かを成し遂げた事がなかったので、とても嬉しかった。

本当は学生時代にこんな風に一緒に喜んでくれる友達に囲まれて

いたかったのだけど、視聴者の皆さんやリーンさんのおかげでそれを叶える事ができました。

「リーンさんっ…！　ありがとうっ…！　ぐすっ…！　ありがとうございますっ…！」

「ふふふ、いいえ、でも、これはカッピーが頑張った結果よ？　胸を張りなさい？」

「お母さんっ…！　うわぁぁぁん…！」

『カッピー大号泣ｗ』

『まあ、…カッピーは昔がね…』

『言ってやるな…』

『せやな…』

そう言って、皆からの温かなコメントが溢れていました。

リーンさんの姿が亡くなったお母さんと重なって、恥ずかしながら、さらに涙が出てきてしまいました。

本当はもっと親孝行したかったなと思っていたんです。けど、もう今となってはそれを叶える事もできません。

リーンさんも私がお母さんと呼んで泣きついてきた事に最初はオロオロしてましたけど、やがて、慈愛に満ちた眼差しで優しく何度も頭を撫でてくださいました。

視聴者の皆さんも私の事情を知ってる方が多数居ますからね、そういった経緯からか、今回ばかりは生暖かい眼差しで見守ってくださってました。

しばらくして落ち着いた私はリーンさんから背中をさすってもらいながら立ち上がります。

「リーンさんありがとうございます、だいぶ落ち着きました」

「カッピーちゃん…」

「すいません、リーンさんが亡くなった母に重なってしまい、取り乱してしまいました。お恥ずかしいところをお見せしてしまいましたね」

『ファッ!?』
『カッピー…お母ちゃん亡くなってたんや』
『知らんかった…』
『→以前、話とったで?』

そう言って、コメント欄からは私の事情を知らない視聴者さんから驚きの声があがります。
新規の方も増えてきてましたからね、私の事を知らない人がいても当然、おかしくはないです。こういう事は私自身も思い出してしまいますからあまり大声で話したくはない事ですし。
リーンさんは優しい眼差しを向けながら、手を重ねて私にこう告げてくる。

「良かったら聞かせてもらえる?」
「…は…はい…ナッチーには…以前、もう話したんですけど」

そこから、私は動画の撮影を切らないままでナッチーに話したように過去についてリーンさんに全てを話した。
正直、何度口に出しても辛い事なんですけど、隠しておく方がなんか余計に辛い気がしましたし、今はどちらかというとナッチーをきっかけに打ち明けたいという気持ちの方が強いですからね。
話し終えた私は出来る限りの作り笑いを浮かべ、リーンさんにこう告げる。

「こんな感じです…重いでしょ?」
「…辛かったわね…」
『泣いた』
『そいつら絶対許さねぇ』
『ほんとひでー話だよな』

そう言って、リーンさんさナッチーと同じように優しく私の頭を抱

き寄せるようにして抱き締めてくださいました。
視聴者の皆さんも私の境遇に怒りや同情をしてくれました。その言葉が本当に嬉しいです。
本当なら、シーちゃんにもこのことは打ち明けたいのだけど、なかなかそういった機会も無い…というか、私から言う勇気がないんですけどね。
こうして、抱きしめていた身体をゆっくり離すとリーンさんは満面の笑みを浮かべ私にこう告げる。

「うん、なら、私が今日からカッピーのお母さん役をしてあげるわね！
というか、お母さんになってあげます！」
「えっ！　…で、でもそれは…」

リーンさんのいきなりの申し出に目を丸くする私。
いや、いきなりそんな、私の事情を知ってくれたのは大変嬉しいのですけど、そこまでリーンさんに求めたら申し訳が無いですよ。
すると、リーンさんは有無を言わせないとばかりに私を抱き寄せ、頭を撫で始めると続けてこう話始める。

「良いわね？」
「…は…はい…」
「よろしい」
『良かったな』
『本格的に聖女』
『ほんまお母さんやで…』

そう言って、撫でてくれるリーンさんの手は手袋越しにも関わらずとても温かいものでした。
それから、私はリーンさんに連れられて、ナッチー達と無事に合流し、その後は一緒に楽しく滑りました。
なんだか、この旅をしているうちに私自身もいろいろ変わってきた

のかなと、素直にそう思います。

拝啓、天国にいらっしゃるお母さんへ。

「写真撮るよー！」
「はーい！」
「よーし！　良いぞ！」

私に新しいお母さんと大切な友人たちができました。

ナッチーの掛け声と共に集合する皆、そして、写真を撮る合図を出して、シーちゃんがシャッターを切る。

私達四人は満面の笑みを浮かべ、皆が楽しそうに映る綺麗な写真が出来上がった。

勇者カッピー小休止する。

さて、前回、スノーボードを存分に楽しんだ私達なんですけども、遊び疲れたのでとりあえず宿に帰って参りました。
いやはや、なかなか楽しかったです。
初めてのスノーボードという事もあり、ちゃんとできるようになるか心配でしたが、リーンさんが丁寧に教えてくださった事もあり、無事にコツをマスターすることができました。

「いやぁ、スノーボードって意外と楽しいんですね」
「カッピーちゃん上手くなったよねー！　滑るの！」
「だな、見事な上達ぶりだ」
「えへへ、それほどでも…」

私は照れ臭そうに笑いながら頭を掻いてにやける。
先生が良かったですからね、きっと、リーンさんじゃなかったらあんな風に上達できなかったかと思います。
さて、今晩はこのマウンテンパレスの街に泊まるんですけどもしばらく、二日ほど滞在しようかと皆で話し合って決めました。
山越えにはかなりの体力を消耗するというので、まずは長旅での疲れを一気にここで取り除いておこうという訳ですね。

「あ、皆さんはマウンテンパレスの食事でオススメとかあります？」
『せやなー、やっぱり山魚かな？』
『ツキマツタケがオススメやで』
『山ならベニアカシカの肉やろ』

私が視聴者の皆さんに質問すると次々と山の幸と思われる食材が流れてきます。

おぉ、なんとも旨そうですね。特に気になるのはベニアカシカの肉でしょうか？　シカ肉なんて私食べたことありませんからね。
一方でリーンさんは今日はお酒が飲めると上機嫌でした、シーランドでは飲めませんでしたからね。

「うふふ、確かマウンテンパレスは山葡萄のワインがとても美味しいのよね」
「へぇ…山葡萄…」
「それは私も飲んでみたいな」

なんでも、マウンテンパレスのよく熟成されたワインは舌触りもよく、香りも最高に良いのだとか。
私も久しぶりにお酒を呑んで楽しみたいなとか思ったりしてます。たまに晩酌とかて一人で呑んでた事もあるんですよね、私。
そうして、私達は宿に着くとまずはスノボで着ていた服をカウンターに預けました。
湿気とか匂いとかが付いてますので、カウンターで預けておくと翌日、綺麗な状態で返ってくるそうです。
魔法の力って本当に便利ですよね、生活には欠かせませんし、主婦の味方ですよ。
ちなみに私はロクに使えませんけどね、はい、私生活は魔法を一切使わずわ一人暮らししておりました。
さて、そんな訳で私達四人は食事の前に宿にある露天風呂に入る事になりました。
山の景色を一望できるんですって、凄いですよね！
本当はこの喜びを視聴者さん達ともわかり合いたい気持ちはあったのですが、女子風呂ですからね、流石に撮影はＮＧでした。

「ふぃ…あー身体があったまるんじゃ～」
「気持ちいいわよねぇ～」
「脳が溶けそう～」

「あへぇ～」

極楽とはここだったのですね。

スノーボードで疲れた身体を露天風呂に浸かってゆっくりと癒すって本当に最高だと思います。

私達四人は並んでだらしない顔をしながらグラナダ山を見つめつつ言葉を溢します。

筋肉痛もジワジワ来てたのでこれは本当に長旅には最高の薬になりますよね。

じんわりと身体が温まってきた頃、ナッチーは私とリーンさんの胸をジーと見てきます。

「…カップとお姉ちゃん…でっかい」

「あら？　そうかしら？」

「な、ナッチー！　一度見たじゃ無いですか！　貴女！」

「私は初見だが、…確かに見事だな」

私とリーンさんの胸を見ながら、下手したらグラナダ山より絶景かも、とか言い始める二人。

いや、山より絶景な胸ってなんですかね、確かにでかいのは認めますけど、そんなに言うほどじゃないですよ？　私のバストサイズは。

リーンさんのも私と同じくらいですから、普通です。

「いやいや、これは事件ですぞ、シーちゃん殿」

「確かにそうだな、とりあえず、ナッチー並んで見てくれないか？」

「はい？」

そう言って、ナッチーをわざと私とリーンさんの間に挟み始めるシーちゃん。

そこには見事な凸凹が出来ていた。悲しいかな凹のところは最早言うまでもないだろう、察してあげてください、皆さん。

この悲惨な光景に耐えられ無かったシーちゃんは涙を流しながら口元を押さえる。

「うっ…！　すまない、胸囲の格差社会がこんなに悲惨だなんて…」

「おいこら、何やってんだお前」

涙を流すシーちゃんに青筋を立てるナッチー。

私は青筋を立てるナッチーを見つめて、先日のことを思い返す。

そう言えば、私も言われっぱなしでしたからね、ここいらで一発くらいかましといてもバチは当たらないはずだ。

私はナッチーの胸を見ながら渾身の一言を送る。

「かなりまな板だよ、これ」

ナッチーからグーパンが飛んできた、流石に酷いと思う。

いや、確かに悪意はあったけど、グーパンが飛んでくるとは思わなんだ、結構、良い感じにクリーンヒットしましたからね。

それを聞いたリーンさんとシーちゃんは大爆笑。

ナッチーは顔を真っ赤にしながらプルプルしてました。

私もね、ナッチーくらいの慎ましい胸で良かったんですよね、正直に言うと、何でこんなに成長したのか自分でも謎です。

「あー！　クソー！　誰がまな板じゃあ！　私の胸は成長期だし！それなりにあるんだからね！」

「あ…うん…」

「胸が痛い話だな、板だけに」

「あんたぶっ殺すわよ」

混じりっ気のない殺意って怖いですよね、シーちゃんお口チャックです。

こうして、散々ナッチーを弄り回した後、私達は風呂から上がりま

す。リーンさんは終始爆笑してました、口押さえて笑うようにしてたみたいですが、普通にバレバレです。
幸いな事は視聴者さんが現場を見てなかった事ですね、そりゃナッチーが貧乳で弄られる事なんかになった日にはカメラが一台ぶっ壊れる覚悟をしなくてはいけなくなりますからね。
さて、風呂から上がった後は食事です。

「おー！　しゅごい！」
「ツキマツタケにグラナダシャケの刺身か！」
「うわぁ！　これ美味しそう！」
『飯テロや！』
『あーお腹すいた』
『俺のマツタケはどうだい？』
『→そのシメジ仕舞えよ』

こらこら、ご飯食べるって時に下ネタぶっ込んでくるんじゃないよ。
何はともあれ、私達は豪華に並ぶ食事の前に座り手を合わせます。いやはや、こんな食事が食べれるなんて旅をしていなくては考えられませんでしたよね。
お酒を注いで、皆でグラスをつけあわせます。

「かんぱーい！」
「いえー！」
「お疲れー！」
「呑むぞー！」
『ええなー』
『今度、マウンテンパレス行くか』
『かんぱーい』

コメント欄も私達を労うように便乗して乾杯してくれました。

それからは呑んで食べて、ワイワイと賑やかな話で盛り上がります。まだまだ、旅が始まってそんなに時間は経ってはいませんが話すことはつきませんね。

これから先、どんな旅になるんだろうとか、視聴者さん達の事についてとか、いろんなことをお話ししました。

そんなこんなでお酒をガンガン飲み過ぎて、その後はだいぶカオスな状況になってしまいましたね。

私もなんか、記憶が曖昧でそこから先は覚えていません、ただ唯一覚えているのは、呑み過ぎたせいで皆でトイレで吐いた事です。

勇者カッピー山に登る。

さて、それから二日経ちました。
私達は山越えに必要なものを買い揃える事ができ、後はこのデカくて長い山道を越えていくだけとなりました。
しかしながらそびえ立つグラナダ山はデカい、本当にこんな山越えられるのかな？

「カッピー、原付バイクとキャンピングカーどうする？」
「とりあえず、便利なポケットを視聴者さんに頂いたのでそれに収納していこうかなと…」
「ポケットに収納なんてできるのか…」
『未来型カッピー』
『なお机の中に引きこもる模様』
『アカン』

コメント欄で視聴者の人達が何か言ってますが、敢えてスルーします。敢えてね。
まあ、そんな訳で、今日から山登りするんですけど、身体が持つか不安ですね。というか足がそもそも持たない気がするんですがそれは。
登山用リュックと防寒着を身につけた私達はひとまず、道案内役の方に連れられて山を登っていきます。
それから大体、２時間後。

「ハァ…ハァ…つ、辛い…」
「酸素が薄くなるからね…」
「話すと余計に…ハァ…ハァ…疲れるぞ…」

時には獣道を通り、道無き道を行きます。

冒険家になったみたいですね、もう私は家に帰りたくなってます。
帰りは山越えは無しの方向でいきましょう、てか、そもそも回り道していけばよかったんじゃないかと今更ながら思いますね。
さて、しばらくすると川が見えてきました。とりあえずここで一旦休憩するようです。

「見て見て、足がパンパンになっちゃったよ」
「先はまだ長いからな、しかも序盤も序盤だ」
「足が浮腫まなきゃ良いけど…」
『ふぉおお！　生足だぜぇ！』
『女の子の足は良いものだ』
『山はねぇ…なかなか大変』

山をひたすら登る映像なんて変わり映えしませんからね。
たまに動物とかは見かけましたけど、道中にモンスターとかから襲われないように道案内の方が安全な道を先導して教えてくれます。
私達だけで山越えしようとしたらえらい目にあってたでしょうね。
グラナダ山の奥にはベヒーモスと呼ばれる重量級の魔物なんかも生息してるみたいですし、コボルトとかたまにオーク、ゴブリンなんかも森で彷徨うと遭遇してしまうそうです。
女の子だけで登っては大変危険なので、皆さんも道案内さんをつける事をおすすめします。
さて、ここからはダイジェスト！
私達はひとまず、休憩を終えてから改めて登山を再開させました。
大体、3時間くらい歩くと雪景色が見えてきます。山の上の方まできた証拠ですね。
ただし、天候によっては引き返す事も全然あると言われてましたので、私達はどちらかというと運がいい方だと思います。
そこから、日が暮れてくるまで歩き続け、今晩は降りに差し掛かった雪山でテントを張って寝ることになりました。

「うわぁ！　見て見て！　星がめちゃくちゃ綺麗！」
「雲が掛かっていて絶景だな」
「キヌッターに上げよう！」
『すげー！』
『山の上って良いなぁ』
『写真欲しいわ』

視聴者さんも大満足の景色を堪能した私達でしたが、しかしながら足はパンパンです。
普段から、山なんて登りませんからね、途中で投げ出しそうになりましたし、心が何度か折れかかりましたけど、皆がいてくれたのでここまで登る事ができました。
引きこもりだった私だけど、こんな事ができたんですね、生きていてよかったと心からそう思います。
さて、その後は晩ご飯を皆で身体を寄せ合いながら食べて、翌朝に備えます。
山の上は酸素が薄いし、お腹いっぱい食べると高山病になるので腹八分目にしておかないといけないみたいです。
今のところみんな無事ですけどね、体力を早く回復しとかないと。
それから翌朝になり、私達は山を降りはじめます。

「降るのは少し楽かも」
「けど、足に負担が掛かるのって降りらしいよ？」
『へー知らなかった』
『踏ん張って体重支えるからなぁ』
『なるほど』

意外と知らない豆知識なんかも山登りの経験を経て学んだりできましたから良い勉強になりますよね。
降りをスイスイと降りていくと、道案内さんが指をさしてくれます。その指の先には街が見えてきました。

マウンテンパレスの反対側の街ですね、こちらもマウンテンパレスって名前なんですけども、大体、山越えする人はこの街を利用して身体を休めてから再び冒険に繰り出すとか。

まあ、一晩、山で寝泊りした私達でしたが、さすがに体力の限界でした。

だいたい、１０時間以上は山に登ってましたからね、そりゃきついよね、私なんて途中、力尽きて倒れそうになってましたもの。

そんな時、私を助けてくれたのはシーちゃんでした。

「ほらもう少しだ、頑張れ」

「あぅー…」

『カッピーダウン』

『まあ、仕方ないね』

昔に山を登った経験から慣れてると自信満々に言ってくる彼女があの時ほど頼もしく映るとは思いもしませんでしたね。

さて、それじゃようやく宿についた私達なんですけど、風呂に入ってリフレッシュした後にそのままバタンキューと皆、ご飯も摂らずに就寝してしまいました。

いやー山はすごかった。撮影してましたけど、途中でやめましたもんね。

話す気力すら残ってなかった。

皆さん、山登りにはまず体力作りを毎日欠かさず行いましょう。じゃないと私達みたいになりますよ？